
萌えっ娘もんすたぁ ～カントー萌えもんリーグチャンピオンへの成長記～

三月語

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

萌えっ娘もんすたあ　くカントー萌えもんリーグチャンピオンへの成長記

【Nコード】

N05900

【作者名】

三月語

【あらすじ】

マサラタウンに住む少年、信彦が、新たな旅を始めた。

その目的は、過去の苦しみへの決別か、あるいは新たな目標の決定か・・・

作者の萌えもん進行ややる気により不定期更新になる事をご了承

ください！

Story 1 旅立ちの日（前書き）

さあ始まりました！というか、作り直しました！

短編となっていたので、ホントすいませんでした！

では、どうぞ！

Story 1 旅立ちの日

「・・・様、・・・人様・・・」

「ん・・・、後・・・5分くらい・・・」

一人の女性に起こされる少年。

少年は『あと五分くらい寝させてほしい』と訴え、なかなか起きようとしていない。

「ご主人様、オーキド博士に呼ばれているのではないのですか？」

「・・・そうだった！ーやっべ、忘れてた！ー」

女性に『ご主人様』と呼ばれた少年は、女性の言葉の内容に飛び起きた。

「母さん、行ってくる！ー」

「信彦、朝ごはんは！？」

「帰ってから食べる！まずは博士のそこ行ってくる！ー」

「では、行ってきます。」

「信彦もリルカちゃんも気をつけてね！ー。」

慌てて家を飛び出した少年、信彦はリルカと呼ばれた女性を連れ、

オーキド博士の許へ走って行った。

「すみません、遅れましたあつ!!」
「相変わらず寝坊しかできないんだな。」

勢い良くドアを開けた信彦に軽口が飛ぶ。

「・・・って春樹？なんでお前がいるんだよ？」
「俺もじーさんに呼ばれたんだよ。理由は知らねえ。」
「・・・ったくよお、呼んどいてそれはないだろ？」
「そんじゃ、探して来い。」
「命令形かよ畜生！お前も行け！」
「面倒臭え。」
「・・・あいつ、放置しとくか。」
「・・・そうですね・・・」

信彦はリルカを連れてオーキド研究所を後にした。

「博士はたぶん・・・1番道路にいるな。大方萌えもんでも捕まえにいったんだろうけど。」

「そうでしょう・・・ね。あの人は萌えもん研究の第一人者ですから。」

「一応、マサラを探し回ってみるか・・・」

「ええ・・・」

ここで簡単に萌えもんについて説明しておく、萌えもんというのは、人の姿をしたモンスターのことであり、『萌えっ娘もんすたあ』の略称である。

萌えもんは人と共に生き、人の生活に溶け込んでいるのだ。仲間として、家族として、パートナーとして。

信彦と一緒にいるリルカもまた、萌えもんなのである。

・・・逸れた話を戻そう。

「・・・いないな・・・」

「本当に・・・、1番道路へ向かったのでしょうか・・・？」
「行ってみるか。」

そして1番道路に足を踏み入れた瞬間。

おい！

二人を呼びとめるような声がした。

「この声は・・・、博士か！」

「おーい、待つんじゃない！」

信彦を呼び止めたのはオーキド博士。

「博士、今まで一体どこにいたんですか！？人のこと呼んどいて・・・」

「いやー、すまんすまん。ちょっと近くに用があつてな。それより、研究所に来てくれんか？」

「あ、それは構いませんけど・・・」

オーキド博士についていく形で信彦とリルカは研究所に入って行った。

「じーさん、待ちくたびれたぞー！」

「お前は何もしてないだろうが！」

「春樹か・・・？おお、そうじゃ、わしが呼んだのじゃった！ちよつとまっておれ。ほれ、信彦、机の上を見てみる。」

「机の上？」

信彦は机の上を見る。

「ほっほ！机の上にあるモンスターボールには、萌えもんがいるのじゃ！知っておると思うがな。」

「知っているのは当然だよ。それで、一体何を？」

わけがわからない、という感覚で信彦はオーキド博士に聞く。

「お前には一度初心に帰ってもらおうと思ってな。その3匹のうち1匹を連れて旅に出てほしいのじゃ。さあ、選べー！」

「あつ、ずるい！じーさん、俺にもくれよ！」

「まー、慌てるな春樹。お前にも好きなのをやろっ！」

春樹がオーキド博士と言い合いになっている最中、信彦は先に3匹を見ていた。

「一番左にいるのがフシギダネか。草・毒タイプで育てやすい……。真ん中がゼニガメ、育てがいがあらしい……。そして最後がヒトカゲ、じっくり育てる人向き……」

信彦は3匹の特徴を言いながらよく見ていた。

3匹は『私を選んで』と訴えるように信彦を見ていた。

「俺は……、ヒトカゲ、君に決めた。」

信彦はヒトカゲが入っているモンスターボールを手に取り、開けた。

「ま、ますたあ、よ、よろしく、お願い、します……／＼／」

出てきたヒトカゲは顔を赤くしてもじもじしながらも『よろしく』と告げた。

「こちらこそよろしく。それで、このサーナイトはリルカ。」

「よろしく願いしますね。」

「は、はい・・・／＼／」

（信彦：恥ずかしがり屋なのかな？）

信彦がリルカとヒトカゲを見て思っていた時・・・

「俺はゼニガメにするぜ。」

春樹はゼニガメの入ったモンスターボールを開けた。

「マスター！よろしくね！」

春樹が手に入れたゼニガメは、信彦が手に入れたヒトカゲとは対照的に、元気よく挨拶をした。

「おっ、あのヒトカゲとは違って元気がいいな、こいつ！」

「えうつ・・・」

春樹が言った一言でヒトカゲは涙目になった。

そして・・・

「ふえええええ・・・」

泣き出してしまった。

「ちょっと待て春樹！『あのヒトカゲとは違って』ってどういづ」とだよ！？」

「そのまんまの意味だが？お前のヒトカゲは暗いからな？」

「ふええええええ・・・」

「泣かないで下さい、大丈夫ですから。」

春樹の言葉に泣き続けてしまうヒトカゲだが、それをあやし続けるリルカ。

「てめえ・・・ここでバトルしろ！俺が勝ったらヒトカゲに謝れ！」

「良いぜ？こいつに勝てるならな？」

信彦が怒り任せに春樹にバトルを挑んだ。

春樹が出したのは、イワークだった。

「御主人様、今回は一体何を？」

「あいつをつぶせ。」

「了解。」

臨戦態勢になった春樹のイワーク。

「・・・リルカ、今回はお前に頼みたい。あの事をまだ引っ張つて
と思うけど・・・、この戦いだけは負けたくないんだ！」

「・・・分かりました。私も彼の不遜で傲慢な態度に腹が立ち始め
ましたので・・・！」

リルカが泣いているヒトカゲを信彦に預け、臨戦態勢になる。

信彦 リルカ（サーナイト） L V ・ 7 3

V S

春樹 エルナ（イワーク） L V ・ 6 9

「てめっ、いつの間にサーナイトを!？」

「もうあの事を繰り返したくなかったから!しっかりと育てたんだ!リルカ!様子見で避けて、隙ができたなら『シャドーボール』!」

「わかりました!」

「エルナ、隙を与えるな!」

「了解!」

エルナはリルカに突進する。

体を少し斜めになっているため、ダメージを与える範囲が少し広めになっている。

「こんなものっ、当たりません!遅すぎです!」

それをあっさりと回避するリルカ。

「はっ!」

そして避けたその直後に『シャドーボール』を放つリルカ。

エルナはそれをよけることができません・・・

バシュッ！

「うぐあっ！」

きゅっしょに あたった！

直撃し、更に、急所に当たった。

「ぐっ・・・」

攻撃も高いリルカの『シャドーボール』を受け、膝をつくエルナ。

「さあ、これで終わりです！」

「まだ、終わるわけにはあつ！」

リルカが止めとして『サイコキネシス』を放とうとした瞬間、イタチの最後っ屁の如く『たたきつける』を放った。

だが。

「そんなもの、予測しないとも思っていました？さあ、止めです！」

リルカはさらっと回避して止めの『サイコキネシス』を放った。

「うぐっ・・・あつ！」

止めの一撃を放たれ、崩れ落ちるように倒れたエルナ。

「・・・信彦の勝ち、じゃな。」

「くっ・・・！」

「さあ、ヒトカゲに謝れ！」

オーキド博士の宣言を受け、信彦が春樹に詰め寄るが・・・

「・・・誰が謝るかよ！そんな奴に！」

エルナをボールに収め、春樹は研究所を出て行った。

「・・・逃げたか・・・。ごめんな、ヒトカゲ。」

信彦はヒトカゲに謝る。

「だ、大丈夫、です、ひつく・・・」

信彦に『大丈夫』だと涙声で伝えるヒトカゲ。

「ホントにごめんな・・・」

それでも謝る信彦。

「・・・／／／」

そんな信彦に涙目ながらも顔を赤くしてしまうヒトカゲ。

「ニックネームをつけないとね。リルカ、何かいいのが無いかな・・・？」

「私には・・・、何も思い浮かびません・・・」

「そうか・・・。だったら・・・『ミナ』はどうだ？」

「良い名前ですね！」

「それじゃ、ミナ。今後よろしくな。」

「は、はい！ますたあ！」

ノブヒコは ミナを てにいれた！

「博士、行つてきます!」

「お前の母さんに言つてくることを伝えるんじゃぞ!」
「わかつてます!」

信彦はオーキド研究所を後にした。

「リルカ、母さんに言った方がいいのかな？」

「・・・とりあえず言う方がいいかもしれませんね。」

「そうだな。ミナの紹介も兼ねて、行ってくることを言うか。」

「ただいまー。」

「あら、おかえり。オーキド博士、何の用だったの？」

「『初心に帰って、旅をして欲しい』んだと。だから、俺、旅に出る。」

「そう……。5年前みたいにまた出かけるのね……。気をつけていつてきてね。」

「うん。あ、それと新しい仲間なんだけど、ヒトカゲのミナ。」

「ど、どうも……／＼」

「あら、オーキド博士にもらったのね。大切にしなさいね。」

「わかってる。じゃ、行つてきますー！」

こうして、信彦の旅が始まった。

彼の旅は山あり谷あり、決して楽なものではないだろう。

だが、仲間がいる限り、彼は決して・・・

この旅を諦めたりはしないだろう・・・

To the next Story・・・

現在の手持ち：信彦

リルカ（サーナイト♀）（漢字で書くと利瑠香）

L v ・ 7 3

やさしい性格

技 シャドーボール

サイコネシス

10まんボルト

うたう

おまけ：信彦が5年前の冒険で仲間にした萌えもん。

信彦に忠実で彼の生活の支えともなっている。

彼女の心の奥底では・・・？

ミナ（ヒトカゲ♀）（漢字で書くと美菜）

L v ・ 0 5

なきむしな性格（+デレデレ）

技 ひっかく

なきごえ

-
-

おまけ：信彦がオーキド博士からもらった萌えもん。

とても泣き虫でちょっとした悪口でもすぐ泣いてしまう。

信彦大好き。

S t o r y 1 旅立ちの日（後書き）

- ・ 信彦については、後々語ります……。彼の過去について、特に・

次回、S t o r y 2 1 番道路の救出劇、お楽しみに！

Story 2 1番道路の救出劇(前書き)

旅立ち後の話となるStory 2です！

今回は萌えもんが増えます！

では、どうぞ！

Story 2 1番道路の救出劇

1番道路。

「ミナの育成も兼ねて、暫くここで戦う?。」

「その方がいいでしょうね。ニビジムリーダーは岩タイプ使いと聞いていますので。」

「ま、ますたあ、私には不利ですう・・・。」

弱気になるミナ。

「大丈夫です。ここでしっかり戦って、強くなればいいんですから。」

「傷ついてもちゃんと回復してあげるから。安心して戦っていいよ。」

「ますたあ、ホントお・・・？」

涙目になって信彦に聞き返すミナ。

「ホントだって。バカなことは言うけど、嘘はつかないからね。」
「ますたあ・・・、ありがとお・・・／＼／」

信彦の足にぴったりとひつついて歩くミナ。

「・・・」
「り、リルカ？」
「な、なんでもありません！」
「・・・お前の本心、わかってるけど、ごめんね。答えられなくて・・・」
「は、はい・・・／＼／」

リルカは信彦の謝罪に顔を赤くして返事した。

「1番道路だから出てくるのはポツポコラッタ、それ以外だとせいぜいポチエナくらいだね・・・」
「色々おかしいですね。ラルトスやデルビル、イーブイなど、今まで見られることのなかった萌えもんがいますね・・・」
「ますたあ、どうしたの？」

ミナが信彦に周りの雰囲気にはえながらどうしたのかと聞く。

「いやね？生態系が変わってるな、って思ったんだ。」
「生態系・・・？」
「昔ここにいなかったはずの萌えもんがいますからね。疑問に思っていたんです。」

それでもその辺をふらふらと歩きまわる3人。

ある程度散策してから。

「あ、あれは・・・！」

「こんなところにエアームドがいるなんて・・・」

3人の目の前にいるのは、少し弱っているエアームドだった。

「あの、誰かと戦って、逃げてきたんじゃないでしょうか・・・？」

「あの傷の付き具合、そうとしか取れないね・・・」

エアームドは少しずつではあるが、確実に先ほどより弱っていた。

「いけない！リルカ、彼女に話せる！？『敵対の意思はない、助けようとしている』って！」

「わかりました！」

リルカはエアームドに近寄る。

「あの・・・」

「・・・なに？（キツ）」

リルカが近付くと、エアームドは敵意の籠った眼でリルカを睨みつけながら聞く。

「大丈夫です。私たちはあなたを助けようとしているんです。敵対する意思はありません。」

「信用できないよ・・・。あの人も今までの奴と同じ、私を倒そうとしているでしょ？」

信用できないということを告げ、立ち上がろうとするが・・・

ガクッ・・・

「くうっ・・・」

膝から崩れ落ちるように倒れてしまう。

「・・・よし、『かいふくのくすり』があつた！」

「ますたぁ、本当にあの子の傷を治せるんですか？」

「応急処置的なものだけど・・・、何もできないよりはいい！」

信彦は回復の薬を取り出し、エアームドに近づく。

「ほら、ご主人様は戦う意思はないでしょう？」
「・・・一応、信用するね・・・」

戦う意思がないことを理解したエアームドは素直に信彦の接近を許した。

「・・・全身ぼろぼろだな。大方強いのと戦闘して負けかけたから逃げたんだろうけど・・・。ここまで痛めつけることなんてないのにな・・・。おっと、ちょっと沁みるけど我慢しろよ？」

「・・・うっっ！」

回復の薬を吹きかける信彦。

急にかけることはせず、予め一言掛けてからかける、傷のことを気遣うなど、優しいところを見せている信彦。

それが彼の優しさなのだ。

「おっとと、ごめんな。・・・んー、これ以上は無理、だな。俺ができるのもあくまで応急処置程度だから・・・、萌えもんセンターに連れて行かないといけないし・・・。」

「・・・なんでここまでしてくれるの？」

「ほっとけないから、かな？どんな萌えもんだって生きているんだし、死にそうなのを放って行くなんてことはできないよ。」

「っ！！！！／／／／」

信彦の見せた笑顔に思わず顔を赤くしてしまうエアームド。

「とにかく、このままだったら危ないし、とりあえず萌えセン連れて行くか。」

「・・・に・・・たい・・・」

『ん?』

エアームドがぼそぼそつと何かを呟いた。

「私も・・・、一緒に行きたい・・・／／／」

「ま、ますたぁ・・・」

「俺も想定外だよ・・・。だけど、トレーナーの意思じゃない時は萌えもんの意思で一緒に行くことを決めたりできるって聞いたことがあるけど・・・」

「でも、なぜですか?」

「そ、それは、その、ま、マスターのことが、す、す、好きに、なっちゃったんだもん・・・／／／」

「・・・(り、リルカ、この場合、俺はどう答えればいいんだ?)」

「・・・(わ、私も知りません!)」

信彦とリルカは何とも言えなくなってしまうっている状況だった。

「マスター、これからも、ずっと・・・一緒にいてね?／／／」

「ますたぁ、私も・・・いい?／／／」

信彦に抱きつくエアームドとひつつくようにいるミナ。

そんな二人に焦ってしまう信彦だった。

「と、とにかく！まずはトキワシティに向かうぞ！エアームドを回復してそれからだ！」

「マスター、あのね・・・？」

「な、なに？」

「名前、付けてほしいなあ・・・／／／」

エアームドがもじもじしながら名付けを頼む。

「・・・萌えセン行ってからね。」

「うん・・・／／／」

どこか疲れたように信彦はトキワシティに向かった。

「では、お預かりします。」

「すみません、まだモンスターボール持ってないんで・・・」

「大丈夫ですよ。今回はサービスです。」

「あ、ありがとうございます。」

エアームドを預け、近くのソファに座る三人。

「この間に名前、決めとこ？」

「ますたあが決めてくださいよぉ・・・。私、そういうの苦手だもん・・・。」

「私も・・・、そういうことが苦手なので・・・。」

「わかったわかった。俺が考えておくから、二人は・・・そうだな、リルカ、ミナを鍛えてやってくれない？」

「はい、わかりました。」

「ますたぁ・・・」

「大丈夫、絶対強くなれるから。」

「あうう・・・、行つてきますう・・・」

リルカに連れられてミナは特訓に行った。

「名前名前・・・」

信彦は地道に名前を考えていた。

外・1番道路。

「り、リルカあ、本当に強くなれるのお・・・？」

「大丈夫ですよ。強くなって、ご主人様の役に立つのでしょうか？」

「ま、ますたあのために頑張りますう！」

「じゃあ、まずは簡単な戦闘の基礎からです。」

「は、はいっ！！でっ、デルビルう！かってこーい！」

ミナはリルカと共に修業を始めた。

トキワシティ・萌えセン

「お預かりしたエアームドは元気になりました。ですが、額の傷が治るようなものではなかったなので、完全完治とはいきませんでした・・」

モンスターボールに入れられたままエアームドが運ばれてきた。

「もともとぼろぼろだったので、額以外にもどこか残るだろうと思っていたのですが、額だけ、ですか。」

「はい。でも、元気になったので。」

モンスターボールを受け取り、萌えセンから出る。

「ほら、出てきて。」

中にボールを放り投げ、ボールが開く。

「マスタああああ!!」

「ぐおおおっ!!」

出てきた瞬間、落下の勢いも含めてエアームドが信彦に抱きついてきた。

ただ問題だったのが、落下の勢いに任せて抱きついたため・・・

『ぽふっ』ではなく、『ズドン!』だったことだ・・・

「マ〜ス〜タ〜!」

「げほっ、頼むからどいて・・・。さっきので気持ち悪くなった・・・」

「やだ〜!離れたくない〜!」

一悶着を起こす二人。

「お願いだつて！うぷっ、このままだと・・・は、吐きそう・・・」

「すぐ退く！」

現実、顔が蒼白になったことで信彦が吐きそうなことを理解した瞬間、さっと離れたエアームド。

「はあっ、はあっ、はあっ、い、今までこんなことなんてなかったぞ！？」

先ほどのことで息が荒くなっている信彦は、さっきの気持ち悪さについての感想をなぜか言っていた。

「抱きついたりするのはいいけど、時と場所と状況を考えてくれよな、『アミ』。」

「え・・・？」

「君の名前。よく考えたけどいいのが浮かばなかったからそれにしたんだ。」

「マスター、改めてよろしく！そして・・・／／／」

「なんだ？」

エアームド・・・アミは顔を赤くしてもじもじします。

信彦はなぜかが分からずに聞き返した。

「あ、あのね、マスター、その、す、未永く、お、お付き合いを・・・
／／／」

「・・・今は『仲間』として、ね。」

「それでも・・・、よろしく・・・／／／」

アミは信彦にぎゅうつと抱きつく。

力が入っていないので、全く痛みを感じなく、信彦もそのまま置いておくことにした。

が。

「・・・ご主人様？」

「ますたあ？」

リルカとミナが戻ってきた。

「お疲れ二人とも。どう？」

「今はどうかという話じゃありません・・・！なんで、なんでエアムドが抱きついているのですか！？」

「無理に振りほどくのもちよつと気が引けて、かな？あ、このエアムドは『アミ』って名付けたから。」

「・・・アミ・・・、ご主人様から離れてください！」

「やだ！マスターのお嫁さんになるんだもん！」

「ご主人様と結婚できるのはあなたではなくて私です！」

アミとリルカが口論を開始。

自由になった信彦はその場をすつと離れた。

「ま、ますたあ、『およめさん』とか『けっこん』って何？」

「・・・ミナにはまだ早いことなんだ。もつと大きくなったら教えてあげる。」

「私だけ仲間外れだよ・・・、くすん・・・」

「仲間外れじゃなくて、まだ、その、な？言い辛いんだよ。ごめんな。」

「うん・・・」

ミナとちよつと話す信彦。

「そついやミナ、修業の成果は？」

「んとね、レベルがう上がって『ひのこ』覚えた！」

「お、えらいえらい。よく頑張ったね。」

「ふにゅ・・・」

ミナが特訓の成果を報告し、それを頭をぐしゃぐしゃと撫でながら褒める信彦。

ミナも信彦にされるがままにしていた。

一方では・・・

「リルカは本当にマスターのこと考えているの！？」

「考えてます！というか、思っています！あなたにマスターの思いがわかるのですか！？」

「わからないもん！だって、まだ出会ったばかりかだもん！だけど、マスターの全てを受け入れる自信はあるよ！」

「わ、私だってすべて受け入れる自信はあります！何をされたって構いません！」

「私だって何されてもいいもん！」

「いや、そこは構ってよ・・・」

「？」

ヒートアップし二人の許へまで聞こえてきた口論。

内容に信彦が律儀に突っ込み、ミナは頭に疑問符を浮かべていた。

T
o
t
h
e

n
e
x
t

S
t
o
r
y
.
.
.

手持ち萌えもん

リルカ（サーナイト♀）

Lv.73

やさしい性格

技 シャドーボール

サイコキネシス

10まんボルト

うたう

おまけ：信彦への恋愛感情あり。とある事情によりその思いは叶わぬまま。

信彦への呼称は『ご主人様』。

ミナ（ヒトカゲ♀）

Lv.10

なきむしな性格

技 ひっかく

なきごえ

ひのこ

-

おまけ：信彦への感情は『like』の好き。

ちよつとだけ怖がりなところが消えたようだ。

信彦への呼称は『ますたあ』

アミ（エアームド♀）（漢字で書くと『愛美』）

Lv.8

いちずな性格

技 つつく

にらみつける

すなかけ

はがねのつばさ

おまけ：1番道路にて信彦達に助けられた。

助けられた時の信彦の笑顔に撃沈、ベタ惚れした。

信彦命の恋愛一直線で一途な子。

信彦に恋愛感情を持っていて、長年連れ添っているリル力は恋敵。ただ、彼女もとある事情により思いは叶わない・・・

信彦への呼称は『マスター』が基本だが、たまに『ダーリン』とか『旦那様』などと暴走する。

Story 2 1 番道路の救出劇（後書き）

エアームドのアミが仲間になりました。

デレデレかすなおかで迷いましたが、すなおにしました。

次回、Story 3 Comeback to the Mas
ara、お楽しみに！

Story 3 Cameback to the Masara (前書き)

今回はポケモンでも萌えもんでも絶対にあつたイベントがあります。

更に、また萌えもんが増えます。

では、どうぞ！

Story 3 Cameback to the Masara

「よし！ある程度ミナもレベルが上がったし、ニビシティに向かうか！」

「はい！」

「うん！」

「わかりました。」

ニビシティへ向かうことに決定し、意気揚々となる信彦達。

だが・・・

「・・・あのおじいさん、誰から見ても酔っ払ってますね・・・」
「あ、どこかのトレーナーが通り過ぎようとしてる。」

祖のトレーナーを観察し、おじいさんの動向を見る四人。

そして。

待つんじゃー！ひつく！わしはなあ、こつ見えても、ういつ、バリバリの凄腕トレーナーだったんじゃ！

おじいさんに捕まった。

「・・・よし、ショップに向かおう。あのおじいさんの酔いが醒めるまでは絶対に通れないだろうし。」

「ですね・・・。ジム戦はまた先送りに、ですか・・・。」

「でもでも、ますたあ、なんでお店に行くの？」

「アミに『かいふくのくすり』使っちゃったから、『キズぐすり』を買いだめしておかないとね。」

「マスター・・・／＼／」

「そこ、顔赤くしないで。助けたくて助けただけで、好きとかどうとかの意思はないからね。」

軽く漫才も含め、一行はショップへと向かった。

ショップに入った瞬間・・・

「おっ、君はマサラから来たんだね？ちょっとこっちに来てくれるかい？」

「あ、はい、何でしょうか？」

店員に呼ばれた。

「オーキド博士にお届け物があるんだけど、忙しくて持っていけなくてね。これ、持っていてくれないかな？」

「あー、わかりました。」

ちょっと歯切れの悪い返事だったが、信彦は了承をした。

ノブヒコは おとどけものを てにいれた！

「・・・まさか、こんなに早くマサラタウンに戻るなんて思わなかったよ・・・」

「えっと、マサラタウンから旅立って3時間ですよ・・・？」

「マスターがマサラタウンから出て、私とあつて、回復してもらつて、それでお店から出てくるまでが！？」

「な、なんか、もう里帰りしちゃうね？」

驚きを隠せない面々。

「とにかく『おとどけもの』をオーキド博士に渡そう。そうすればあのおじいさんも酔いが醒めて通れるだろうし。」

「そう・・・ですね。」

しびしびマサラタウンに戻ることにした面々。

途中、デビルビルやポップ、コラッタ達がミナに先程の報復に来たが、アミに

「私とマスターの邪魔をするな〜!!」

の声と同時に放たれた『はがねのつばさ』によって、全滅したのは余談である。

「・・・ただいま、マサラタウン・・・」

たった3時間たっただけの帰還を果たした信彦達は

「・・・ははは、帰ってきたのに全然嬉しくないや」・・・」

「ご、ご主人様、気を確かに！」

「だいじょーぶ。俺は気にしない。」

「ますたぁ・・・、こわれちゃだよぉ・・・」

「壊れてないよ？」

「・・・だめですね。完全に壊れてます。」

「マスターの・・・バカぁ・・・」

『3時間で帰郷』という事実を受け入れられずに半ば崩壊しつつある信彦を元に戻そうとするリル力達であったが、結局、半壊したままとなった・・・

「ご主人様・・・」

リル力もまた、心配し始めていた。

「ますたぁ、私が『おとけもの』、渡してこようか？」

「・・・はっ！？み、ミナ、さすがにそれはダメ！危ないから！」

「マスター！元に戻ったんだ！」

アミが信彦に（信彦が復活した瞬間）抱きついた。

「・・・なあリルカ、アミの性格ってなんだったっけ？」

「・・・『いちずな性格』でした！」

「・・・怒らないでくれよ・・・。俺だった好きでやってるわけじゃないんだしさ・・・。」

「むーっ・・・。」

頬を膨らまして抗議の意思を示すリルカ。

傍から見れば可愛いのだが、この抗議は嫉妬の抗議。

リルカがやきもちを焼いただけなのだ。

「ますたあ、ホントに『おとどけもの』をわたそ？日が暮れちゃうよ？」

「そう、だな。アミ、離れてくれ。つか、ボールに入ってくれ！」
「やー！」

「『や』じゃありません！」

数分後、嫌がるアミをボールに無理やり戻し、オーキド研究所に向かった。

「おお、信彦か。ヒトカゲはどうじゃ？」

「ミナですか？ここにいますよ？」

「ど、どうも・・・／＼」

「ほお、お前に懐いているようじゃな。お前にはやはり、才能があるのう。」

「あ、博士、お届け物があつて。」

「ん？わしにお届け物？」

オーキドは おとどけものを うけとった！

「おお！これは注文しておった特注品のモンスターボールじゃ！どうもありがとよ！」

オーキド博士にお届け物を渡し、戻ろうとした瞬間。

「じーちゃん！」

春樹がオーキド研究所に来た。

「じーちゃん、俺に用事ってなんだよ？」

「おお、そうじゃったそうじゃった。ちょっと待っておれ。」

そう言いながらオーキドは机の上に置いてある機械を手を取った。

「ほれ！最新型の『もえもんずかん』じゃ！」

ノブヒコは もえもんずかんを てにいれた！

「この図鑑はな、萌えもんに出会つと自動的にデータが書き込まれていくハイテクな図鑑なのじゃ！」

「で、これをどうしろと？」

「お前たちには、この図鑑を完成させてほしいのじゃ。わしも昔は、現役バリバリのトレーナーじゃった。しかし今ではもうジジイ！そこでお前たちに図鑑の完成を頼んだのじゃ！」

「まだ元気一杯だと思っけどなあ・・・」

「とにかく、頼んだぞ。」

「よし、任せとけ、じーちゃん！信彦、悪いけどお前の出番はねーぜ！」

「勝手にしとけ。俺は俺でやるからさ。」

信彦にあっさりと返されたが、全く気にしない様子で春樹は研究所を出て行った。

「じゃあ、俺も・・・」

「信彦、もう一つお前に頼んでもいいか？」

「もう一つ・・・ですか？」

出ようとしたところを呼び止められ、引き返す信彦。

「うむ。お前にはこのフシギダネと一緒に連れて行ってほしいのじや。」

「フシギダネを、ですか？しかし、なんで・・・」

オーキド博士が持っているフシギダネは、ボールをカタカタ動かすことも無く、大人しくしている。

「最近じゃが、夜中に泣きだすようになってな？それで理由を聞いてみたら、『ヒトカゲちゃんを連れていったトレーナーさんと一緒に行きたいですっ！一人ぼっちはいやなんですう！』と言ってな・・・」

「それで、その子の要望通りに俺に連れて行ってほしい、と。」

「そういうことじゃ。」

「そういうことなら喜んで。」と、信彦がボールを受け取るうとしたその瞬間。

• • • • •

「さ、殺気!？」

「ま、ますたあ、あ、アミのボールが、こ、怖いよお……」

ミナの言葉通り、殺気の発生場所はどうかアミのモンスターボールからだ。

「あ、アミ、で、出てきて……」

ボン！とモンスターボールから出てきたアミ。

「マスター……、私という女がいて……、他の女の子に手を出すなんて……、ひどいよ……」

「いや待て、頼まれただけで、実際手を出したわけじゃ……」

「そのフシギダネ、マスターの顔を見てもじもじしてるもん……」

「はあっ!？」

受け取ったボールを見ると・・・

はう・・・／／／

信彦に見られたということを認識した瞬間、フシギダネは顔を赤くしてしまった。

「マスターは絶対渡さないもん!私のものなんだから!」

「ご主人様はあなたのではないとさっき言ったばかりですよね!？寧ろ、私のです!」

「あのあの、今ここで言い争いをしても意味ないと思うんだけど・・・」

「」

『意味ある言い争いなのだ!』

「あうう・・・、ふええええええええええ・・・」

アミとリルカが再び言い争いを始め、ミナが仲裁に入ろうとしたが、二人の物凄い剣幕に圧倒され、泣き出してしまった。

「・・・フシギダネ、出てきてくれ・・・」

宙にボールを放り投げ、フシギダネを出す。

「あ、あの、ご主人様あ、よ、よろしく、お、お願い、しますう・
・／／／」

「まず、ミナを慰めてほしいんだ。ヒトカゲね。」

「は、はいい・・・／／／」

ちょっと間延びした声のフシギダネは、ミナを慰めに向かう。

「えぐっ、ひぐっ、あうう・・・」

「ミナちゃん、もう泣かなくてもいいんだよぉ。」

フシギダネはフシギダネでミナを慰めるのを頑張っており・・・

「わたしは、その、ま、マスターに何もかも捧げる覚悟はできてる
の！／／／」

「そんな恥ずかしがって言っているのでは覚悟はできてません！私
だって、その、加、覚悟はできてます！／／／」「二人ともできて
ないことになるぞー。」

リルカとアミの口論は相変わらずの激化を辿り、信彦はそれに突っ
込むだけであった。

「・・・いつも、こうなのかのう・・・」

オーキド博士はオーキド博士で、こつ呟くしかなかった。

「それじゃ、今度こそ本当に行ってきます!」

再びマサラに別れを告げた信彦。

「つと。それと、これからもよろしくな、『アイ』。」
「はい。」

フシギダネのアイと簡単に言葉を交わし、一行は再び、トキワシテ
イに向かった。

「・・・そういえば、今まで普通に萌えもんゲットしたっけ？俺・・・」
「たぶん、してないですね・・・。貰うか勝手に仲間になったか、でしたし・・・」

T o t h e n e x t S t o r y . . .

手持ち萌えもん：信彦

リルカ（サーナイト♀）

Lv・73

やさしい性格

技 今までと変わらず

おまけ：信彦の恋愛的事柄にはかなり豹変し、やきもち焼きになったり嫉妬したり、急に口数が多くなる。

だけど、そこまで言えるのは心から信頼している証。

ミナ（ヒトカゲ♀）

Lv・10

なきむしな性格

技 前回と変わらず

おまけ：少しは治ったであろうはずの泣き虫は、治っていなかった。
・

アミ（エアームド♀）

Lv・9

いちずな性格

技 前回と変わらず

おまけ：人前でも爆弾発言が平気で出来ちゃう傍から見れば淫乱な子に・・・？

アイ（フシギダネ♀）（漢字で書くと『愛』）

Lv・5

てんねんな性格

技 たいあたり

なきごえ

n o n e

n o n e

おまけ・ミナととても仲がいいフシギダネ。

信彦のことが気になっている。

信彦への呼称は『ご主人様』。

Story 3 Cameback to the Masara (後書き)

今回はフシギダネのアイが仲間になりました。

あと、ポケモンや萌えもんで使われた表現を使ってみました。

次回、Story 4 トキワの森迷走劇！、お楽しみに！

Story 4 トキワの森迷走劇！（前書き）

今回は仲間の大切さが分かるかもしれない回です。

まあ、いろいろ突っ込めるところは多いですが。

では、どうぞ！

Story 4 トキワの森迷走劇！

「ますたあ・・・、どこお・・・？ぐすつ・・・」

自分の主を涙目で探すヒトカゲがいた。

彼女はミナ。

ご存知、信彦の萌えもんである。

では、なぜ彼女が一人で森を彷徨っているのか・・・？

時間は1時間前に遡る・・・

— 1時間前 —

1番道路で思いっきり野生を叩きながらトキワシティに着いた一行達。

「お、あのおじいさん退いてる!」

「これで二ビへ行けますね!」

「初めてのジム戦、初めてのジム戦・・・」

「私、マスターのために頑張る!」

「・・・アミ、「マスターのために」、「じゃなくて、『みんなのために』じゃないの?」

「私が頑張らないとマスターのためにならないもん!」

「・・・リルカ、ちよつと来てくれ。」

「はい、何でしょうか?」

信彦に呼ばれたリルカはただ一人、信彦についていく。

「あの、ご主人様? いったい何を・・・」

「今度のジム戦なんだけど、リルカをあまり使いたくないんだ。」

「・・・そのことなら重々承知してますけど・・・」

「だけど、ミナモアミもアイも蹴散らされてしまふ可能性だつて否定できないでしょ?」

「相手は岩タイプ使い、と聞いてますし、可能性はありますね。」

「だからリルカ、最後の切り札として使うけどいい?」

「ご主人様のお役に立てるなら。」

「ありがと。」

「そ、そんな、お、お礼を言われるようなことでは・・・//」

信彦の『ただのお礼』に顔が真っ赤になるリルカ。

くどいようだが、本当に『ただのお礼』である。

「マスター！いったい何を話してるのー！？」

「きつと、次のジムで勝つための作戦でもたててたんだと思うよお？」

「ますたあ、早く行かないと日が暮れちゃうよ？」

「おっと、そうだったけ。行く、リルカ。」

「はい！」

トキワシティで軽い作戦を立てた一行はニビシティに向かうためにトキワの森に入った。

「『トキワの森は天然の迷路、迷ったり逸れたりしないように気を付けて』、か。」

「確かに、逸れたりしたら探すのに大変ですし・・・」

「・・・よし、みんな。絶対に俺から離れるなよ？」

「は、はいい・・・」

「えっ！？抱きついてもいいの！？」

「そうは言ってないけど・・・」

「ご主人様は『離れるな』って言ったただけだよぉ？」

「ふふふ・・・、あ、あれ？ご、ご主人様、ミナの姿が見えないんですけど・・・」

「・・・まさか、逸れた？」

いつの間にかいなくなつて（逸れて）しまつたミナに焦る。

「このままだと絶対まずい！手分けして探すぞ！」

『はい！』

「わかつた！マスターの命令だもん！」

手分けしてミナを探し始めた信彦達であつた・・・

— 今 —

「ますたあ・・・どこお・・・？くすん・・・」

信彦がどこにいるか全く分からず、ましてや、右も左も分からなくなってしまうほど道に迷ったミナは、途中にあった切り株に腰掛けて心細くなってしまっていた。

更に・・・

くうう・・・

「お腹・・・すいた・・・」

ミナを空腹が襲う。

「ますたあ・・・、ふえ、ふえええええええ・・・」

ついには泣き出してしまっ。

「おい、ミナー、どこだー!？」

ありったけの声で叫びながら森を走りまわる信彦。

「・・・ここはない、か。だったらこっちだ！」

1つの道を見終わったことを判断したら、別の道を調べる。

人海戦術をとると楽な方法を使って探していた。

「ミナ、無事でいてくれよ・・・」

信彦もまた、心配が募りだしていた。

「ミナー、どこー!？」

アミは低空飛行をしながらミナを探す。

「・・・あつ。」

そして、あることに気づいて動きを止めた。

「もし私がミナを見つけて、マスターの許に連れて戻ってこれれば・
・・・頭撫でてもらえるかな？もしかしたら、き、キスしてもらっ
ちやったりして!？でもでも、それって恥ずかしいよお!でも、し
てもらいたいし・・・きゃー!」

・・・アミは暴走してしまった。

アミは　こんらんした！

「ミナちゃん、どこお〜？」

アイはただひたすら走りまわっていた。

「ミナちゃん、どこ行っちゃったんだろお・・・」

彼女も心配が募っていた。

「ミナちゃん！」

そして、再び走り始めた。

「・・・そうですか、ここではヒトカゲを見てませんか・・・。
ありがとうございます。」

リルカは近くにいたトレーナーなどに聞き込みをし、少しでも情報を得ようとしていた。

「ミナ、待っていてください。すぐに見つけ出してあげますから！」

リルカは仲間のために奔走していた。

「ますたぁ・・・(きゅるるる)・・・(はっ)・・・」

ミナは切り株の上でうずくまっていた。

その時。

かさっ・・・

「っ!？」

草むらの音に驚いて飛びのいてしまっミナ。

出てきたのは・・・

「・・・?どうしたの?涙で顔がぐちゃぐちゃだよ?」

キャタピーだった。

「・・・ふええええええ・・・」

「・・・泣き虫なんだね。あなた。多分、マスターとはぐれたんで

しょ？」

「ふえええええ・・・」

号泣しているミナをよそに、泣いている理由を大体で推測するキヤタピ」。

「ミナ、どこに行ったんだ・・・？急がないと野生と勘違いされるかもしれないし、誰かに何かされないか心配だ・・・！」

持ち主として、主としての心配を募らせていく信彦。

「ミナー！どこだー！？」

信彦がそう叫びながら一本の道に入った瞬間。

「ミナって、そのヒトカゲのこと？」

キャタピーが信彦のところに向かってくる。

敵意は見られない。

信彦がはっとなって先を見たら・・・

「ミナ！」

「ますたあ……ぐすつ……」

三十一、発見。

「よかった！何もなくて無事だったんだ！」

大泣きして信彦の許へ走り寄るミナ。

「よかった……、無事で……」

「ふええええええええええ！」

信彦も安堵の表情を浮かべる。

「よかったね、マスターに会えて。」

「一緒にいてくれてありがとな、キャタピ―。」

キャタピ―は二人の再開を確認したら、立ち去って行った。

「・・・さ、みんなと合流しようか。」

「うん・・・ひつく・・・。」

信彦はミナの手を引いて、集合場所へ向かっていった。

集合場所。

「はぁ・・・、ミナちゃん、見つからなかったね・・・。」

「どこへ・・・行ってしまったのでしょうか・・・?」

「マスターも帰ってこないし・・・。」

リルカ、アミ、アイが心配しながら待っていたら・・・

ミナいたぞー！

ちよつと遠く的位置から信彦が叫んだ。

『（マスター／ご主人様）！！』

三人が信彦達の許へ駆け寄る。

「ミナ、無事だったんですね！？」

「ああ。キャタピーと一緒にいてくれたしな。」

「マスターも無事でよかったー！！」

「ミナちゃんの方も心配してあげなよ・・・」

「ふえええええ・・・」

合流できたことに安心したのか、また泣き出してしまった。

「さ、今度こそニビシティに向かうか！まだジム戦をやっても勝てないから鍛えないといけないけど。」

「はい！」

「うん！」

「では、行きましょう。」

再びニビシティに向かう一行。

おまけ。

「・・・アミ、一体お前はどれだけ戦い続けた？」

「わかんない♪出てくる敵をちぎっては投げちぎっては投げ・・・
つてやってたらこんななつてた♪」

「あの短期間でLv.16・・・。普通はありえないだろ・・・」
「マスターを思つてのことだもん！」

To the next Story...

手持ち萌えもん：信彦

リルカ（サーナイト♀）

やさしい性格

Lv・73

技 今までと変わらず

おまけ：仲間の危機は親身になって取り組む優しい萌えもん。ミナ（ヒトカゲ♀）

なきむしな性格

Lv・10

技 今までと変わらず

おまけ：気をつけないと迷子になっちゃっどジっ子性質持ち。

アミ（エアームド♀）

いちずな性格

Lv・16

技 つつく

エアカッター

はがねのつばさ

すなかけ

おまけ：信彦がいないとかなり暴走する。

いつの間にかレベルを底上げしてしまうほどの領域だ。

アイ（フシギダネ♀）

てんねんな性格

Lv.7

技 たいあたり

なきごえ

やどりぎのタネ

none

おまけ：最近ツツコミ型になりつつある・・・

Story 4 トキワの森迷走劇！（後書き）

今回出てきたキャタピーは今回限りの友情出演です。

多分今後は出さないでしょう・・・

次回、Story 5 『大人しくさせてください・・・』（BY信彦）『、お楽しみに！

Story 5 大人しくさせてください・・・（by信彦）（前書き）

今回は・・・核弾頭コンビが出ます・・・

かなりぶっ飛んだ発言をしますのでそこは注意してください！

ただ、かなりギャグ風味が強いかな・・・？

では、どうぞ！

Story 5 大人しくさせてください・・・（by信彦）

「ニビシティに着いたーっ!!」

「ジム戦やるぞー!」

『無理だから無理だから。』

信彦が着いたと叫び、アミがジム戦だと叫び、一斉に突っ込まれた。

「なんでー!?わたしのマスターの愛があれば楽勝なのにー!」

「愛があっても勝てないものは勝てないの!」

「たぶん私でも勝てないよ?ご主人様が優秀でも私たちがダメだったら意味ないもん。」

「ううゝ・・・」

ジム戦ができないためにうなるアミ。

「だから、今から鍛えに行くんだよ。特にアイを。」

「私ですかあ?」

「そ。アイはニビジムリーダーが使うタイプの天敵だからね。」

「天敵・・・あ!」

「ミナはわかったみたいですネ。」

ミナが何か理解したような声をあげ、リルカがそつと言う。

「アイの現状だとあっさり負ける可能性だってないから、鍛えに行くんだ。2番道路のニビ側で、ね。」
「はい。」

全員が応えて、改めて2番道路に向かった。

2番道路。

「よし。アイはリルカに重点的に鍛えてもらってきて？ミナとアミは適当に戦って鍛えていくしかないけど、アイは一番重要な位置にいるからね。」

「わかりました。．．．どのくらい鍛えれば？」

「そうだね．．．、『つるのムチ』は最低限必須と考えて．．．、

できれば進化するくらいまで。」

「わかりました。では、Lv・16を目安にしますね。」

「うん、任せたよ。さ、二人はここで萌えもんと戦っていくんだ！

あ、技は考えてね。PPなくなっても回復できないから・・・ね。」

「はいっ！」

「やだ〜！マスターと一緒にいるう〜！！」

「・・・行つてこないと逃がすよ？」

「行つてまいります！」

ミナとアミは二人で同じように歩いて行つた。

「ふう・・・。アミがいないとまたミナが迷子になってしまうかもしれないね・・・。さて、俺は俺で対策を練るかな・・・？」

信彦は近くの切り株に腰掛け、頭を捻り始めた。

「ニビジムリーダー・タケシは多分・・・先発はイシツブテだろうな・・・。そのあとはイワークかサイホーン、サニーゴのどれかな・・・。」

タケシの情報がある程度つかんでいた信彦は推測を立てていたが、数分後・・・

「すう・・・すう・・・。」

そのまま眠ってしまった。

その頃、リルカとアイは・・・

「てやーっ!」

「・・・そろそろ、レベルが上がると思っているが・・・」
「・・・あっ!レベルが上がったよ!」

アミは『つるのムチ』を覚えるレベルまでに至った。

そして、ミナとアミは・・・

「はぁ・・・マスターと一緒にいたいなぁ・・・」

「アミ、そんなにますたぁのことが好きなの？」

「そうだよぉ・・・。はぁ・・・」

(ミナ：『好き』ってどういうことなんだろう？)

アミの(片思いの)恋煩いや『好き』ということが分からずに頭を捻るだけのミナだった。

「・・・//」
「・・・//」

信彦の寝顔を見ている二人の萌えもんは顔を赤くしていた。

片方の諸に犬っぽいのはポチエナ。こちらは生態系が狂う前から萌えもんである。

もう片方のゴスロリ的なのはデルビル。こちらは生態系が狂ったあとからいる萌えもんだ。

二人が顔を赤くしていたのは・・・

勝手に信彦のことを好きになってしまったのだ。

「・・・むう。」
「・・・むっ。」

ふらふらと歩み寄ってきて勝手に好きになり、お互いを恋敵と認識・

なんと勝手たることか。

「この人は私のなんですう！」

「違うの！この人は私のなの！」

「・・・誰が言い争ってるんだ・・・？」

二人の言い争いを聞いて信彦が目を覚ました。

その瞬間。

『私をあなたの奴隷にしてください！』

「いきなり何！？」

爆弾発言に10歩ぐらい後ずさる信彦。

「あの人の奴隷になるのは私なの！あなたじゃないの！」

「私なの！あなたじゃ奴隷に相応しくないもん！」

「どっちも相応しくないってば！」

爆弾発言に必死に突っ込む信彦。

「とうにかさあ！これ以上そんなこと言われると俺白い目で見られるからやめて！？」

『じゃあ奴隷にしてください！』

「だが断る！」

それでも断るのに必死。

「何ですか!？」

「いやさ？ 奴隷つてもう古いじゃん？ それにそうゆーの俺嫌いなんだけど？」

でもお！

それでも食らいつく彼女らに必死に抵抗している信彦。だが……

$$\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array}$$

「はっ！？」

突如感じた鋭い殺気。

「・・・ご主人様・・・？その子たちに何をしようとしているんですか・・・？」

「何もしようとしてない！つか、されかけている方が正しい！」

「じゃあ、『奴隷にしてください』という声は何ですか・・・？」

「そ、それは・・・」

『私の望みなんです！』

「そこで油を注ぐかなあ！？」

ポチエナ・デルビルが本当にリルカという火に油を注ぐような発言をしてしまったために頭を抱えた信彦。

「・・・ご主人様・・・？どうするんですか・・・？」

「・・・俺に言わないで・・・？もう泣きたい・・・」

リルカが信彦に一步近づくと、信彦を守るようにデルビルとポチエナが前に立つ。

「・・・はあ。ご主人様、今回だけですよ？」

「だから、誤解したままにしないで！？仲間としては迎えるけど、奴隷としては扱わないからね！？」

信彦は頭を抱えたまま蹲ってしまった。

「マスター、よろしくお願いします．．．／／／」
「わ、私もよろしくお願いします．．．／／／」

顔を赤らめてまでお辞儀をする二人。

「．．．リルカ、俺の死体は海にでも流してくれ．．．」
「ちょ、ご主人様！？何縁起の悪いことを言っているのですか！？」
「．．．アミに殺されるだろうな．．．、精神的に．．．、倫理的に．．．、法律的に．．．」
「ご主人様！？ご主人様あ！？」ブルーが入った信彦を必死になつて元に戻そうとしたリルカの姿が2番道路で見られた．．．

「マスター、ミナ、かなりそだつ．．．た．．．」

アミがミナと共に戻ってきてみたのは．．．

リルカに膝枕されている信彦。

抱きついているポチエナとデルビル。

「マスター……どういことなの……？」

「あ、アミが黒い……」

「だ、大丈夫ですよ。浮気じゃなくて、勝手に恋をされたというか・
・・」

「ダメなのぉっっ!! 私なのぉっっ!!」

「ヤンデレ化した!？」

「あ、アイちゃん、と、止めて……」

「いい加減にせんかい! (スパン!)」

「あだっ!？」

『つるのムチ』を使ってアミを止めたアイ。

「ミナちゃんが怖がっちゃってるでしょ? やめなよ、そっつのは・
・・」

「あっう……」

アイはたった3時間でアミの扱いを理解したみたいだね・・・思
った信彦だった。

「・・・もう日が暮れるんだね。じゃ、今日はニビの萌えセンで過
ごす?」

「そうしましょう。野宿する必要が無いですからね。」
『はい。』

萌えセン。

「では、今日は一泊するということですね?」
「はい、よろしく願います。」

部屋を一室（7人用）借りて、そこに向かう。

「マスター、私に名前を付けてください。」

「わ、私も！」

「・・・名前・・・じゃあ、デルビルは『リンカ』、ポチエナは『ユイカ』。」

「良い名前ですね・・・」

「・・・むう・・・」

「アミ？」

「・・・マスターを今夜襲おう・・・」

「リルカー、アミがご主人様襲撃予告出したよ。」

「・・・」

「ごめんなさいごめんなさい！」

こんなことがあった。

おまけ

「二人のレベルは・・・あれ？なんか高くない？」
『だって、生き延びるために必死でしたし・・・』
「・・・だから、ね・・・」

T o t h e n e x t S t o r y . . .

手持ち萌えもん：信彦

リルカ（サーナイト♀）

L v . 7 3

やさしい性格

技 前回と変わらず

おまけ：嫉妬レベルがさらに強化。

ミナ（ヒトカゲ♀）

Lv・13

なきむしな性格

技 前回と変わらず

おまけ：ちよつと強くなった。

アミ（エアームド♀）

Lv・16

いちずな性格

技 前回と変わらず

おまけ：ちよつとヤンデレが入った・・・？

アイ（フシギダネ♀）

Lv・14

てんねんな性格

技 たいあたり

なきごえ

やどりぎのタネ

つるのムチ

おまけ：アミの扱い方がわかった？

リンカ（デルビル♀）（漢字で書くと『凜華』）

Lv・13

いちずな性格（マゾ性質あり？）

技 ひのこ

なきごえ

すなかけ

none

おまけ：信彦に完全に一目惚れ。

夢は信彦の奴隷になること（汗）。

生き延びるために戦ってきたため、そこそこ強くなっている。

ユイカ（ポチエナ♀）（漢字で書くと『結華』）

Lv：13

いちずな性格（マゾ性質あり？）

技 たいあたり

とおぼえ

すなかけ

かみつく

おまけ：信彦に完全に一目惚れ。

夢は信彦の奴隷になること（汗）。

彼女もまたリンカと同じように戦ったため、そこそこ強い。

S t o r y 5 大人しくさせてください・・・（by信彦）（後書き）

核弾頭コンビ、ポチエナとデルビル。彼女達の発言を考えれば核弾頭と言えましょう。

あと、『だが断る！』が使えたことがうれしかったりしてます。

次回、S t o r y 6 『再修行！そして進化！』、お楽しみに！

S t o r y 6 再修行！そして進化！（前書き）

タイトル通り進化します！

誰かは言いません！

最後の方で暴走しますが、御覚悟を。

では、どうぞ！

Story 6 再修行！そして進化！

「・・・ん・・・、朝・・・？」

信彦は眼を覚まし、ゆっくりと体を起こした。

「今日は・・・まだジム戦は無理だから・・・、また再修行かな・・・」

冷静な判断を下し、体を伸ばす。

「・・・よし！今日は一気に育てて明日タケシに勝つ！」

信彦は気合を入れてドアを開けようとして・・・

「へぶっ！？」

転んだ。

誰かに足を掴まれていたのだ。

「むにゃ・・・、ますたぁ・・・、一緒にいてほしいよぉ・・・」

掴んだのはアミ。

「・・・よつと。危ない危ない。・・・ポケギアにメールが？なん
だろ？」

信彦はメール着信履歴を見える。

「オーキド博士からだ。昨日のポチエナ・デルビルの件のこと・・・
？」

オーキド博士のメールのタイトルにはこう書かれていた。

「内容は・・・ぶっ！？／／／」

内容を読んで吹き出してしまい、同時に顔が赤くなってしまう。

内容は・・・

《昨日デルビルやポチエナを捕まえた、とあったが、そのことについてある事実が論じてあったのを見たので連絡したのじゃ。》

その内容はな．．．？『イヌ科の萌えもんはある一定条件を満たしてしまうと突然発情してしまう』ということなのじゃ。その条件はわからぬが．．．、とにかく頑張って対処してほしい。

間違っても、逃がすことはしないようにな。》

ということだった。

「ちよ、博士、『発情』って．．．、そりゃないよ．．．／／／」

信彦は未だ夢の中にいるリンカとユイカを見て顔を赤くしながら呟いた。

「・・・つと！それじゃ・・・起きろおおおつ！！」
『きゃあああああ！！？』

信彦が大声をあげ、リルカを除いた萌えもんたちが一斉に悲鳴をあげて飛び起きた。

リルカはすでに起床済みで、トイレに行っていただけであつた。

「ま、ま、マスター！？な、な、なにするの！？」

「ふええええええ・・・」

「あうあうあうあう！？」

「はわわわわわわわ！？」

四者四様の反応を見せる。

アイだけは・・・

「ふわぁ・・・。あ、ご主人様、おはようございますう・・・。」

別段驚くことはなく普通に目を覚ました。

「よし。今日も修行だよ。今回は俺が指示していくから、それに付き従ってくれないかな？」

『マスターの指示！？』

信彦に食らいつくように攻めよるアミ・リンカ・ユイカ。

「ちょ、ちよつと離れて……。今回特に重視したいのがアイとユイカなんだ。」

「私と……。ユイカちゃん？」

「マスター！嬉しいですよ！」

アイは疑問符を浮かべ、ユイカは信彦に抱きついた。

「今日は……。一気に進化する気持ちでいてくれ……。あ、いや・……。今のは無しで……。」

「がつ、頑張ります！」

「わ、私も頑張りますう！」

「……。トホホ……。」

やる気になるユイカとアイ。

それに肩を落とす信彦だった。

「・・・リルカ、今、俺の軽率さに泣きたくなつた・・・」
「・・・まさか、『進化する勢いで』と言つたのでは・・・、ない
でしょうか？でも、落ち込まないでください。」

信彦を慰めるリルカ。

「でもさ、リルカも覚えているだろ？自分が進化した時やリカが進
化した時にも・・・、俺が同じ目に逢っていることを・・・」
「・・・そ、そうでした・・・／＼／」

自分が進化した時や、過去の仲間が進化した時のことを考えて赤面
するリルカ。

「あ、マスター、野生のイーブイやコラッタやポツポがたくさん出
てきたよ！」

「こうなつたらやるしかないか！ユイカ！様子見をして隙が見えた
ら『かみつく』！アイは遠くから『つるのムチ』で牽制をかけた後、
回避して『たいあたり』！」

「てりやー！」

「てーい！」

「ぎゃふん！」
「やったなー！」

遠くから指示を出すだけだが、二人はちゃんとこなしていて、効率よく敵を倒している。

「わ、私だって頑張るもん！」

「わ、私だってー！」

「あ、あわ、あわわわ・・・」アミやリンクも突撃してしまい、ミナは一人あわあわと混乱してしまう。

にゃー！

わー！

ぎゃー！

いやー！

えっちー！

「な、何が起こったんだ？」

「さ、さあ・・・？」

飛び交う怒号や悲鳴や変な声（笑）。

時々聞こえる変な声に思わず突っ込んでしまう信彦。

戦闘は数時間にも及び、そのうちミナにも参加させての大混戦となつた。

結果。

アイ	・	・	・	L	V	・	1	4	↓	L	V	・	1	8	に。
アミ	・	・	・	L	V	・	1	6	↓	L	V	・	1	7	に。
ミナ	・	・	・	L	V	・	1	3	↓	L	V	・	1	6	に。
リンカ	・	・	・	L	V	・	1	3	↓	L	V	・	1	8	に。
ユイカ	・	・	・	L	V	・	1	3	↓	L	V	・	1	8	に。

「・・・あの混戦がここまで強くしてくれるなんて想像しなかったぞ・・・」

「そう・・・ですね・・・」

二人して額に冷汗をかいた。

そして全員が戻ってきた。

「あ、ますたあ！強くなったよ！」

「もー！誰よお！私のおっぱい触ったの！触っていいのはマスターだけのにい！」

「私なんてお尻触られた・・・」

「・・・っ！？（ピクツ）」

「ユイカ？」

「あっ・・・」

「はうっ・・・」

「ミナに、アイも・・・どしたの？」

突如、ユイカ・ミナ・アイに起こった異変に疑問符を浮かべるアミ。

「か、身体が・・・」

「あ、熱いよぉ・・・」

「あっ、ん・・・ふあっ・・・」

三人が同時に身悶えし始めて・・・

「・・・リルカ、俺逃げるから後よろしく。」

「やっぱりご主人様は弱いんですね・・・」

「わかるだろ！？恥ずかしいんだよ！あんな声出すなんて知らなかったんだし！」

信彦がリルカにそう叫んだ瞬間・・・

『ふああああああっ！』

三人が同時に喘ぎ声をあげ・・・

「・・・姿が変わった・・・？」

アミが三人の進化の終了を告げた。

「・・・ほええ・・・」

「進化しちゃった・・・」

「マスター！！」

上からアイ、ミナ、ユイカ。

アイはただ呟くだけのアイと、進化したことに驚くミナ、信彦に飛びつくユイカ。

「マスター、進化できました！」

「だからって抱きつかないで！？なんか色々当たってるから！」

「色々・・・？」

信彦はユイカの肩を押して離そうとする。

「・・・マスターだったら何ともないです！／＼／」

「そーゆー問題じゃないだろ！？倫理とか道徳とかが！」

「マスターは18ですよね！？私はもう17と同じですから問題ありません！」

「そういうことじゃなくて！今ここでそんなことしたら変態と扱われるから！俺が！」

「マスターは変態じゃないんです！変態は私なんです！」

「リルカ！この変態を止めて！？」

「わ、わかりました！ユイカ、やめなさい！」

「いゝやゝですゝ！！」

わがままを言うユイカ。

「ゆ、ユイカ、く、苦し・・・、む、胸が、あ、当たって・・・」

「マスターだったら触られても構いません！というよりむしろ触ってください！」

「ダメだって！落ち付いてユイカ！アミが怖いことになってる！」

リルカがアイの言うとおりアミを見たら・・・

「ユイカ・・・、マスターをそんな小さなおっぱいで誘惑しようなんて、なめた真似しないで・・・？」

「ち、ちっさ・・・」

「マスターはおっきいほうが好きなんだから！」

「言った記憶が無いよそんなこと！？というよりも俺の前で『おっぱい』とか連呼しないでくれないかな！？」

「なんですかー！？おっきくたって無駄なんですよ！？」

「なによー！ちっさくたって意味ないんだからー！！」

「二人とも、落ち着きなさい！！」

リルカが一括する。

「・・・」

「・・・」

「な、なんですか・・・？」

『お、おっきい・・・』

「どこ見てるんですか!？」

リルカも何歩か引き下がった。

「・・・皆が怖いよぉ・・・」

ミナはリザードになったが、結局目尻に涙を湛えるなど泣き虫なところが変わっていなかった。

「・・・私も・・・おっきくなるかなぁ・・・」

リンカは自分の胸を見てそう呟いていた・・・

T o t h e n e x t S t o r y . . .

手持ち萌えもん：信彦

リルカ（サーナイト♀）

L v . 7 3

やさしい性格

技 今までと変わらず

おまけ：以外と巨乳ということが判明。着痩せするタイプ。

ミナ（リザード♀）

L v . 1 6

なきむしな性格

技 ひっかく

なきごえ

ひのこ

きりさく

おまけ：進化しても泣き虫のまま。

アミ（エアームド♀）

Lv・17

いちずな性格

技 前回と変わらず

おまけ：巨乳？かなり暴走している模様。

アイ（フシギソウ♀）

Lv・18

てんねんな性格

技 たいあたり

なきごえ

やどりぎのタネ

つるのムチ

おまけ：進化してよりツツコミ的存在になりつつある。

リンカ（デルビル♀）

Lv・18

技 ひのこ

すなかけ

とおぼえ

にらみつける

おまけ：自分の胸を気にしているようだ・・・

ユイカ（グラエナ♀）

LV・18

技　たいあたり

にらみつける

とおぼえ

かみつく

おまけ：進化したことによりべたべたにひつつくようになった。

自分が変態だという宣言もした。

Story 6 再修行！そして進化！（後書き）

今回、アイ、ユイカ、ミナが同時に進化しました。

この三人、進化レベルが近いのですよ。

次回、Story 7 『ニビジム戦！』、お楽しみに！

Story 7 ニビジム戦！（前書き）

今回はアイがチート臭くなっていることをご勘弁の上ご覧ください。

さあさあニビジム戦。アイのチートレベルや戦い、どんなものなのか！？

では、どうぞ！

Story 7 ニビジム戦！

「よし！明日やるつもりだったけど勢いに乗ってこのままジム戦やるぞー！」

『おー！！』

ミナ・アイ・ユイカが進化し、その勢いそのままにジム戦を決行。

「・・・あの、ご主人様・・・」

「大丈夫。絶対勝てるから。リルカも戦うことはないだろうから。」
「そう・・・だといいたのですが・・・」

リルカは『もしも』を心配していた。

「うじうじしても良くないから！さあ、行こう！」
「・・・はい！」

信彦の誘いに応え、後を追うリルカ。

ニビジム。

「たのもーっ!!」

信彦は勢い良くドアを開けた。

「マサラタウンの信彦、ニビジムリーダー、タケシに勝負の申し込みを！」

「ふふ、威勢がいいな。俺は岩タイプ使い。どんな攻撃にもものともしない萌えもんに負けるとわかって挑むとは、萌えもんトレーナーの性だな！いいだろう！勝負を受けよう！」

タケシが申し込みを受けた瞬間、どこからか審判が表れた。

「では、ニビジム戦を開始します！挑戦者、マサラタウン・信彦！手持ち萌えもん6！ジムリーダー・タケシ！手持ち萌えもん6！」

「いけ、イシツブテ！」

「任せてください！」

「ユイカ、任せた！」

「マスターのため、負けてもらいます！」

イシツブテとユイカがフィールドで対峙する。

「マスター！ご指示を！」

ユイカが信彦に指示を仰ぐや否や・・・

「イシツブテ！『いわおとし』！」

「はい！」

イシツブテが岩落としの態勢に入る。

「回避して『かみつく』」！
「わかりました！」

ユイカがフィールドを駆け、予測された位置に岩が落下する。

「その技、当たりません！があっ！」

それをするつと回避してイシツブテにユイカが噛みつく。

「いつ、痛い痛い！離してよお！」
「ひやれふ！はにやひひやふはいはへん！（訳：嫌です！離したくありません！）」
「痛いっ！腕が千切れちゃうっ！」
「はにやひへほひひやつはら『ほうはん』ひよひつひえふらはい！（訳：離して欲しかったら『降参』と言ってください！）」

ユイカが腕に食らい付き、技はおろかなにもできない状況となったイシツブテ。

イシツブテの体力はじわじわと減っていく。

「うああっ！」

「きゃっ！？」

力任せに体を振り回したためにユイカは飛ばされてしまった。

「もうっ！酷いことしないでください！」

「こっちだって痛かったんだからね！？」

現在HP

ユイカ 68

イシツブテ 12

「イシツブテ！『じしん』だ！」

「でやああああっ！！」

「はっ！」

地面を揺らすイシツブテ。

ユイカはそれをひらりと回避し・・・

ガブッ！！

「あうっ・・・」

ドサッ！

タケシの イシツブテは たおれた！

「イシツブテ、戦闘不能！グラエナの勝ち！」
「よし！ユイカ！サイコーだ！」
「マスター！」

イシツブテが倒れたことを確認した信彦はガッツポーズをし、ユイカは走り寄る。

「イシツブテ、お疲れ様。次は・・・サニーゴ！」
「行きます！」
「サニーゴ対グラエナ！戦闘開始！」

審判が宣言をし・・・

「ユイカ！有無を言わずに噛みつけ！」

先程の戦闘で全然体力が減っていないユイカに先生を仕掛けさせた
信彦。

「サニーゴ、『すなあらし』だ！」
「はいっ！」

あと何メートル、というところでサニーゴが砂嵐を起こし、ユイカ
はちよつと吹き飛ばされてしまった。

「くうっ・・・」
「サニーゴ、『がんせきふうじ』！」
「はあっ！」
「わっ、たっ、うっっ！」

攻撃されるばかりで攻撃ができず、苛立ち始めるユイカ。

「ふっ！」
「あうっ！」

砂嵐のダメージを受けながらもサニーゴに噛みついた。

「離してください！痛っ、痛い痛い！痛すぎますって！」
「ひひやれふ！（訳：嫌です！）」

バタバタと暴れまわるサニーゴに、先程の試合よりも強く噛んでいるユイカ。

「（ガジガジガジガジ・・・）」
「やつ、ダメ、これ以上は・・・はふう・・・」

砂嵐のダメージを受けながらもサニーゴに噛みついていったユイカ。

結果、耐え切れなくなったサニーゴは・・・

「ふにやあ・・・」

目を回して倒れた。

タケシの サニーゴは たおれた！

「サニーゴ、戦闘不能！グラエナの勝ち！」
「ユイカ、今回はもう戻れ！あとは・・・アイにすべてを任せる！」
『はいっ！』

ユイカが下がり、アイが前線に出た。

「サニーゴ、よく頑張った。行け、イワーク！」

この後の戦いは、アイがたった一人で無双をしてしまったため、あっさりとした戦いが続いた。

V S イワーク・・・

『つるのムチ』を用いての巴投げ敢行、急所に当たって一撃必殺。

V S サイホーン・・・

これまた『つるのムチ』を使ってバックドロップ。しっかり決まっ
て一撃必殺。

V S ノズパス・・・

回りをぐるぐる回り、『北しか向けない』というノズパスの習性を
生かし続けた結果、勝手に目を回して戦闘不能に。

そして最後の戦いまで到達した。

「いけ、ウソッキー！」
「了解！」

タケシはウソツキーを出した。

「アイ、まだいけるか？」

「まだいけますう！まだまだ元気ですう！」

信彦はアイに連戦を頼むが・・・

「マスター！私にも戦わせてよぉ！」

今のところ全くいいとこなしのアミがついに吹っ切れた。

「・・・『けたぐり』とか『いわおとし』とかされてあっさりやられたい？」

「あっさりやられないもん！私だって強いんだから！」

「・・・アイ、一度下がってくれ。いつでも出られるようにスタンバイしたままね。」

「はい。・・・ご主人様、あまり気苦労を重ねないように・・・」

「いや、そこまでは言わなくていいけどさ・・・」

アイが下がり、アミがそのまま出ていく。

「ウソツキー対エアームド、戦闘開始！」

審判の合図とともにいきなり突っ込んでいくアミ。

「ちよっ、おまっ!？」

「ええっ!？」

いきなりの行動に信彦とウソツキーは驚いてしまっ。

「ずえええええい!！」

ズガッ!!

「くうっ・・・」

こっかは ばつぐんだ！

アミの『はがねのつばさ』が当たり、ウソツキーに大ダメージを与えた。

「アミ、いきなり突っ込むのは無謀もいいところだよ・・・？」
「勝つための作戦なの！大丈夫ったら大丈夫！」

今まで戦えなかった分の鬱憤晴らしとでも言いたいのか、完全にやる気全開のアミ。

「・・・分かった！避けた直後に『はがねのつばさ』連発！PPが切れたら交代だ！後に劇で倒せるはず、外しても構わないと思って！」

「切れる前に倒して見せるんだから！」

「ウソツキー、絶対に隙を見せないように攻撃だ！」
「了解！」

お互いの指示が飛び、攻撃に徹する二人。

ウソッキーはアミの硬さと速さに翻弄され、攻撃が当たらない。

アミはウソッキーが隙を見せないために攻撃をできずにいる。

アミが突っ込んでいってもウソッキーは迎撃態勢に入ってしまった
めそれを急旋回して避ける。

ウソッキーが攻撃をしようとしてもアミはそれを回避する。

お互いに『決まれば決定打』と言える一撃が決まらずにいた為、試
合は膠着状態に陥った。

(アミ:も〜!『はがねのつばさ』のPPがあと3しかないじゃないの〜!いい加減当たってよ〜!)

(ウソツキー:こっちの攻撃が当たらないなんて・・・、どれだけ素早いんだあのエアームドは!?)

アミはPP切れを、ウソツキーは攻撃の命中率の悪さを心配していた。

「だけど・・・これでおしまいっ！」

アミは当たらないかもしれない『はがねのつばさ』を使った。

「そんなも・・・っ!？」

ウソツキーはカウンターを準備したが、膝が砕けてしまい前のめりになった。

「だあああああっ!！」

その間、それを好機と見たアミはより速度を上げて突撃し・・・

ドゴオっ！！

ウソッキーのちようと鳩尾あたりに翼を当てた。

「ぐ……が……」

ウソツキーは苦しそうになりながらも立ち上がったが・・・

「・・・がはっ！」

急に倒れた。

「ウソツキー戦闘不能！エアームドの勝ち！よって勝者、マサラタ
ウンの信彦！」

「勝ったあああああ！！！」

「マスター、やりました！」

「ああ、アイ、ユイカ、アミ、頑張ったな！」

信彦はアイやユイカの髪をくしゃくしゃと撫でたりしていた。

「いいなあ・・・、私もまたあに撫でてほしいなあ・・・」

「ミナ、あなたは焦る必要はないのですよ？この後ちゃんと役割がありますから。」

「・・・ホントお・・・？」

「はい。だから安心してください。」

その横ではミナにリルカが落ち着くように言っていた。

「・・・ぶう・・・」

完全に出番が無かったリンカは脹れっ面していた。

「・・・ふう。俺の完敗だよ。さあ、リーグ公認のグレーバッチ、受け取ってくれ。」

ノブヒコは グレーバッチを てにいれた！

「このバッチがあれば戦闘中以外でもフラッシュが使えるようになる。そうだ、この技マシンも受け取ってくれ。」

「あ、ああ・・・」

「この技マシンには『がんせきふうじ』が入っている。一度きりだから気をつけて使ってくれよ?」

「ああ、ありがとう!」

信彦はニビジムを出た。

「よし！カントリーリーグへの第一歩だ！このまま勝ち進んでいくぞ！」
『おー！』

ミナ達が片手をあげて意気揚々としている中、アミは信彦の方をぼーっと見ていて、ユイカは自分の体の前で指をツンツンとつついていた。

「・・・どうしたの？」

「マスター、何か・・・、ご褒美が欲しいんですけど・・・」

「お願い・・・、ご褒美ちょうだい・・・？」

簡単なおねだり。

だが、信彦にとっては危険になることだってあるのだ。

「・・・内容にもよるけど・・・、可能なことだったらいいよ？」

『・・・一緒に・・・寝よ？／＼／』

「ちよっ！？だ、ダメですよ！というか、羨ましいです！」

アミとユイカの『おねだり』は、ただただ単純に『一緒に寝てほしい』とのことだった。

が、リルカは猛烈に反対する。

「だ、だってだって、ま、マスターと一緒に寝るって、そ、その、も、もしかしたら・・・／＼／」

「そ、そういうことじゃないもん！マスターのぬくもりが欲しいだけだもん！／＼／」

「そ、そうです！そ、そんなことなんて考えてないです！／＼／」
「・・・そう言っているだけでアウトだと思っただけど・・・？」

またしても信彦が突っ込みに回るといふ状況に。

この日の夜、信彦は（パジャマ姿の）ユイカとアミに抱き枕的に抱きつかれて眠ったという・・・

T
o
t
h
e
n
e
x
t
S
t
o
r
y
:
:
.

手
持
ち
萌
え
も
ん
:
信
彦

リ
ル
カ

基本データ変わらず

おまけ：心配性なところが出た。

ミナ

基本データ変わらず

おまけ：今回、少ししか出番なし。

アミ

Lv・19

技 変わらず

おまけ：ウソッキーに勝つという大金星を挙げた。

アイ

Lv・21

技 たいあたり

はっぱカッター

やどりぎのタネ

つるのムチ

おまけ：タケシの萌えもん3匹に完全に無双発動。

リルカ

基本データ変わらず

おまけ：出番なしに脹れっ面。

ユイカ

L V ・ 1 9

技 変^ズわ^ラず

おまけ：イシツブテ・サニ^ゴに『かみつ^ク』だけで勝^ズ利^スするとい^ハう奇跡^ズを起^スこした。

Story 7 ニビジム戦！（後書き）

アイが3人相手に無傷で勝利、最早チートと言えますね。

ちなみに補足ですが、ジム戦後の夜、信彦はアミとユイカに抱き枕にされていました。

次回、Story 8 『ミナ、3番道路を一騎駆け！』、楽しみに！

Story 8 ミナ、3番道路を一騎駆け！（前書き）

タイトルにもある通り、『あの』泣き虫ミナがたった一人で3番道路を勝ち進みます！

何故？とかどうなったの？等は本文にて！

では、どうぞ！

Story 8 ミナ、3番道路を一騎駆け！

ユイカとアミが頑張り、アイが余裕で勝ったニビジム戦から一夜明け・・・

「オツキミやま、ねえ・・・。ズバットとかいっぱいいるし・・・。気をつけないとイシツブテに全滅・・・そりゃないか。」

「ますたあ、どうしたの？独り言なんかして・・・」

「あ、なんでもないよ？オツキミやまのこと気にしてただけ。ズバットとかどうしようかな・・・とかね。」

「ズバット・・・、怖いよお・・・。」

ズバットの名前が挙がった瞬間に目に涙を湛えるミナ。

「大丈夫だって。仲間がいるだろ？俺達には『暴走車両』が3つもあるんだし、いざというときはリルカも助けてくれるさ。」

「ぼ、『暴走車両』・・・？」

信彦はまだすやすやと寝息を立てているアミ達を指差して言った。

「あ、あは・・・。」

「そうだ、今後のことも考えて、なんだけどさ。」

「えっと、な、なに・・・？」

ミナにちよつとした提案を持ちかける信彦。

「オツキミやままでの間のトレーナー戦、ミナに頼んでもいいかな？」

「え、ええっ！？わ、私に！？む、無理い！無理だよぉ！」

必死に否定してしまうミナ。

「だから言っただでしょ？ちゃんと助けが入るって。」

「え、あ、う・・・」

ミナが『戦わないと強くなれない』というのと（怖い）という二つの心境に板挟みになって困っていたら・・・

「誰え～？さつきからうるさいよぉ・・・」

アイが目を覚ました。

「ああ、アイ、ごめんね。起こしちゃって。」

「あ、ご主人様ならいいですよ？それで、何の話を・・・ふわぁ・・・」

アイは大きなあくびをしながらも話に加わる。

「眠たいならまだ寝ててもいいよ？ミナの特訓だったんだしね。話は。」

「それなら私も手伝いますよお？ミナちゃんの修行だったら私も手伝わないと・・・はふ・・・」

アイも特訓参加。

「ミナの特訓は簡単。3番道路のトレーナーで戦わないといけない人だけと戦っていくんだけど、それを全部ミナで勝ち抜いていく！つてだけ。」

「『ひのこ』だけ、ですか？」

「『ひのこ』だけとは言わないよ。PP切れたら何もできなくなるじゃん？」

「ますたあ・・・、不安だよお・・・」

ミナは心の底から不安がっていた。

「大丈夫、ミナならやれるって！」

「そうそう。ミナちゃん強いから！」

「強くないよお〜！」

ミナは泣き叫びと共に朝を迎えた。

「・・・と言うことで、今日は3・4番道路を突破して一気にハナダシティまで行くつもりなんだけど、3番道路で戦わないといけな
いトレーナーは全部ミナで戦い続けていく予定だから。ということ
で、よろしく、ミナ！」

「ふええ・・・」

3番道路の入り口でミナの頭をぽんと叩いて進撃を開始した。

一戦目・虫取り少年。

「さあ、行くぜ！」

「てやー！」

「とー！」

「やー！」

「こっ、こないでえ！！！」

ガッ、ゴッ、ガン！

『けぺっ……』

『え……』

ミナ、瞬殺勝利。

二戦目・短パン小僧。

「行くぞ！」

「たー！」

「てーい！」

「とりゃー！」

「いやーっ！」

ドゴっ、ガスッ、ゲシャ！

『・・・きゆう・・・』

『何があつたの？』

ミナ、一撃勝利。

3 戦目・虫取り少年

「たーっ！」

「とおーっ！」

「おりゃーっ！」

「虫きらい！」

ズガガガガガガ！

『・・・こ、降参・・・します・・・ガクッ。』

『連勝してる！？』

3戦目まで奇跡としか言いようが無い状態で連勝を重ねたミナ。

「・・・ますたぁ、もう戦いたくないよぉ・・・」
「でもこの快進撃、凄いじゃないか、ミナ！」
「ますたぁ・・・」

本気で泣きたくなくなってきたミナは信彦に涙目になって訴えた。

「けどあいつが最後。いけるって、絶対。」
「勝てなかったら怒るよぉ・・・？」

ミナは頬を膨らませてしぶしぶ、といった形で進撃した。

4 戦目・虫取り少年

「よし、勝負だ！いけ、バタフリー！」
「ミナ、これが最後の戦いだ！」
「は、はい！」

ミナもおどおどしながらでる。

「バタフリー、『ねんりき』だ！」
「はいっ！」
「やっぱりやっ！」

バタフリーは当たり構わずに念力を放ってくるが、ミナは虫嫌いの
合わさってかひらりひらりと回避する。

「このっ・・・、いい加減当たれ！」
「だから来ないでよあゝっ！」

攻撃が当たらずいらいらし始めたバタフリー。

ミナはそれでもひらりひらりと回避。

「くっ、どうして当たらないの!？」

先程から逃げて逃げてを繰り返すミナに焦燥すら浮かび始めたバタフリーはついに攻撃の手を休めた。

「いい加減いなくなつてよぉっ！」

ミナがそれを機と見たのか、はたまたそうでなくやけくそでやったのか、それはわからないが、バタフリーに『ひのこ』を放った。

ボジュウッ!

「うああああっ!!」

バタフリーにしっかりヒットし、そのままバタフリーは墜落。

「も、もう・・・だめ・・・きゆう。」

そのままダウンし、ミナ完全勝利。

「ミナ、凄いよ!全部勝ったんだよ!」

「ますたあの言うとおりだった!やったあ!」

ミナも大喜びの結果。

「おっし、このままオツキミやまのふもとの萌えセンに向かうか!」
『おー!』

ミナのトレーナー4人抜きに意気揚々となった一向は、オツキミやまへと足を進めた。

オツキミやま麓の萌えセン。

「お、新聞だ。」

萌えセンでリルカ以外の萌えもんたちを預けた信彦は、机の上にあった新聞を見つけ、それを読んだ。

「何々・・・？『ロケット団による悪事、近年急増中！萌えもんトレーナーの方々は十分注意してください！』・・・？お、まだ続きがあるんだ。えーつと・・・『最近、『萌えもんをトレーナーから解放する』という不思議な名目を掲げた謎の組織が現れ、被害に遭ったトレーナーは萌えもんを奪われるという事件が多発しています！』・・・？マジで？そんなんいるの？うわー、こいつらかなり引くって・・・」

「ご、ご主人様・・・？どうしたのですか・・・？」

記事を読み、口早に感想（というか愚痴）を言う信彦を心配そうに見つめるリルカ。

「ん？あ、ごめんね。ロケット団とかこの変な組織がバカらしくてさ。だってさ、ロケット団はもつての外、『萌えもんをトレーナーから解放する』なんて不可能な話じゃない？それにさ、その組織、萌えもんを奪っているらしいけど結局はロケット団と同じじゃん？」

「確かに、全く同じとは言えませんが、行動がかなり似通ってま

すね・・・」

「でしょ？・・・オツキミやまにもどちらかがいることを踏んだ方がいいな・・・。リルカ、ここ最近の情報、つかんどいてくれない？対策練りたいから。」

「はい、わかりました。」

リルカは萌えセンの中の人たちに、オツキミやまのことを聞き始めた。

「・・・萌えもんを奪う、ね・・・。バカか。大切なものを失った人の気持ちを考えているのかよ・・・。・・・やべ、あの事思いだしてきた・・・。」

信彦は二つの組織の行動に文句を言い、同時に自分の過去の闇を思い返してしまった。

「ご主人様、聞いてきましたけど・・・、どうしたのですか？涙が流れてますが・・・。」

「へ？俺泣いてる？」

「はい・・・。うつすらとですが涙が頬を伝ってますよ？」

「・・・あの事、思いだしちゃってね・・・。俺のあの失敗を・・・さ。」

「リカ・・・ですか・・・。私も・・・、あのときは力不足を痛感させられましたから・・・。私をもっと強ければ、あんなことに・・・う、っ・・・、ならなかったのに・・・。」

リルカも『あの事』を思い出し、最後は嗚咽交じりになる形で言う。

（信彦：・・・リカ、ごめんな。ダメな主で。お前との約束、まだ、守れそうにないや・・・。また、時間ができたら、ミシロに行くからな・・・。）

信彦はどこを探しても絶対に見つかることのない、昔の仲間に対して心の中で謝罪をした。

「よし！オツキミやま突撃！」
『ラジャー！』

一斉に大声を上げるミナ達。

「あれ？リルカ、どうしたの？涙が流れた跡があるよ？」
「あ、いえ、なんでもないんです。なんでも・・・」
「つらいことがあるなら相談に乗るよ？仲間でしょ？」
「・・・そのときは、お願いしますね・・・」

アイは唯一、リルカの涙に気づいていた。

手持ち萌えもん：信彦

To the next Story・・・

リルカ（サーナイト♀）

基本データ変わらず

おまけ：信彦と二人だけが持つ辛い過去を持っている。

ミナ（リザード♀）

Lv.24

なきむしな性格

技 ひっかく

なきごえ

ひのこ

メタルクロー

おまけ：3番道路で奇跡の4人抜きを達成した。

アミ（エアームド♀）

基本データ変わらず

おまけ：今回出番なし。

アイ（フシギソウ♀）

基本データ変わらず

おまけ：人の気持ちに敏感になった。

リルカ（デルビル♀）

基本データ変わらず

おまけ：今回出番なし。

ユイカ（グラエナ♀）

前回と変わらず

おまけ：今回出番なし。

Story 8 ミナ、3番道路を一騎駆け！（後書き）

ミナ、なんと奇跡の4連勝！

今回は彼女を褒めてあげてください！

次回、Story 9 『オツキミやまでの戦い、信彦の怒り』、
お楽しみに！

Story 9 オツキミやまでの戦い、信彦の怒り（前書き）

今回は信彦がキレます、悪党出ます、奇跡が起きます！

これだけしか言えませんので！

では、どうぞ！

Story 9 オツキミやまでの戦い、信彦の怒り

「ロケット団とかに気をつけながらオツキミやま抜けよう！」

「マスター、ロケット団・・・って、あのヘッポコ集団？」

「ヘッポコじゃなくて、屑。ゴミ。人の萌えもん盗んでどうするんだっての。」

「だよね・・・。相思相愛とかだったら大問題だよ・・・」

「相思相愛関係なしで！今まで育ててきた萌えもんを取られるという苦しさとかがあるじゃん！」

「あり？違う？」

どこか抜けた答えを返したアイに即座に突っ込んだ信彦。

「・・・はあ。とにかく。そんなバカに絡まれたら速攻で逃げる！それでも追いかけられたら寧ろ先に行く！とにかく、関わらない！それでいいこう！」

『はい！』

「・・・おい、全員が『はい』で返したらすっごい怖いんだけど・・・」

「そうですか・・・？マスター・・・」

リンカが聞き返した。

「どこか怖いって。アミみたいに普通タメ口な子がさ？突然敬語だよ？」

「ちよつ、マスター！？なんで私を例えに使うの！？」

「・・・アミしか該当しないし・・・」

「ミナだってそうじゃん！」

『いや、そこはそこだよ（です）。』

「むきーっ！」

全員に肯定されて頬を膨らませるアミ。

「とにかく、先に行こう！」

信彦の声を皮切りに先に進み始めた。

内部・ニビ側。

ここではこんなことがあった。

「お、『わざマシン9・かみなりのキバ』見つけた！誰に覚えさせようか・・・？水対策にリンカに・・・？それともユイカ・・・？よし、リンカ、覚えて！」

「は、はい！」

リンカは かみなりのキバを おぼえた！

「わ、野生のズバット!？」

「わー！来ないでー!!」

「ひー!!」

ズバットを見つけて騒ぎ、ズバットが逆にびっくりしたり・・・

「さて、ズバットとかなんか大量に倒したし、みんなレベルが異常に上がったし・・・カスミと戦ったとしてもある程度善戦できるんじゃないかな？」

「っ！」

「リンカ・・・まさか!？」

おや？ リンカの ようすが・・・

「マスター、か、らだがぁ・・・、あ、熱い・・・、ですう・・・
／／／」

「進化するのかい！？ちよつと待って！？こんなところであんな
なつたら俺赤っ恥だよ！？」

「ごめ、ん、なさつ、あうつ、ひあつ、ふあああああつ！」

待ったも聞かず、そのまま進化。

リンカは ヘルガーに しんかした！

「はふう・・・」

「・・・頼むからさあ、状況とかタイミングとか調整できないかな・・・泣きたい・・・」

「ご主人様、気を確かに・・・」

リルカがすぐさま慰めにかかる。

「私、進化したんですね・・・！・・・」

リンカは進化した自分を見て・・・

アミとユイカのある部分を見て・・・

そして自分のある部分を見て・・・

「・・・ふっ。」

勝ち誇ったかのような笑みを浮かべた。

「な、なによ、いきなり鼻で笑って!」

「そ、そうですよ! いきなり笑うなんて酷いです!」

「お二人よりもおっぱい大きいですよ? わたしのほうが。アミ風に言えば、ご主人様が好きな大きさじゃないんですか?」

かなり優位性に浸っていた。

「・・・そんな胸の話なんてしないでほしいなあ・・・。俺の精神がどんどん病んでくからさあ・・・。」

「あの、ご主人様? なぜか知りませんがどんどん顔が真っ青になっていってますけど・・・?」

どんどん現状に困るしかなくなっていくた信彦に、さらに追い打ちをかけるように・・・

「マスター! (ふにゅん!)」

「うわっ!?!」

リンカが後ろから抱きついた。

「マスター、私の体、デルビルの時より女の子らしくなりました？」

「そ、そう言われてもね？どう返事したらいいのかわからないからね？」

「でも、背も大きくなっただし、おっぱいも大きくなっただし・・・／／」

「分かったから分かったから！とにかく離れて！？もう恥ずかしくなってきたから！」

「嫌です。今までこんなことできなかったんですから。」

「ちよつとリンカ！ずるいよ！誘惑禁止！」

「そうですよ！一人だけ大きくなっただけからって誘惑はダメです！」

「だからった二人も抱きついたりしないで！？俺のライフは0だよ！？」

『ふにゅゝっ！！』

「取り合いはやめなさい！いい加減にしないと・・・」

「っ！？」

一斉にリルカの殺気にリルカの方へ振り向く。

「『サイコキネシス』で三人一気に縛りあげますよ・・・？」

『すいませんでしたあ！』

三人が同時に土下座という、ある意味珍妙な光景が見られたりもし

内部・ハナダ側。

た。

「・・・どこかで何か捕まえようかな・・・？」

唐突に信彦はそう呟いた。

「何か、というと？」

「たとえば、サンドとか。確かカントーには電気タイプ使いがいたはずだからさ、その対策に。」

「確かに、アイだけだったら負ける可能性が高くなりますしね・・・」

「・・・マスター、浮気するつもりなの？」

「どうにか戦力増やそうと・・・あ。」

「どうしました？」

「そうだ、『過剰保持許可申請』取らなきゃいけないんだっ・・・」

「『過剰保持許可』・・・？」

説明しよう。

過剰保持許可とは、単純に『戦闘に使わないがとりあえず手持ちの一部にして所持するのを認める』ということだ。

ただ、それにはトレーナーにも相応の技量が問われるのだ。

「……『過剰保持許可』と同時に『除外対象自由変更許可』を同時に申請しないと、いざという時に使えなかつたりするし……」
「ご主人様、今は仮所持としておいてハナダシティの萌えもんセンターで申請をしたらどうでしょうか……？」

「……そうだな。だけど……初回除外は……」

またまた説明しよう。

信彦が悩んでいる『除外』とは、過剰部分に位置する萌えもんのことだ。

技量が無いか信頼が無いとその萌えもんはどんどん荒んでいくなど

の副作用があるのだ。

「ならばご主人様、私を初回除外の対象にしてくれませんか？今の私は反則級の強さがありますので・・・」

「・・・ごめんね？どこかでサンド捕まえたらそうするから。ただ、ロケット団とかとの戦闘ではガンガン使っていくから。」

「・・・はい！」

というやり取りの後・・・

「あ、いた。サン……ド……」

信彦が見つけたサンド。

そのサンドは、普通とは違った。

「い、色違い……だ……!」

「銀髪だー! 体の色も銀色だ!」

「かわいいなあ……」

「アイ? 何呆けてるの?」

「はっ!? な、なんでもないよ!? なんでも……//」
「顔赤くしていても説得力無いけど?」

アイが何かを妄想したらしく、ちよつと顔を赤くして慌てていた。

「ま、いいさ。とにかくゲットといきますか？ある意味珍しいし・

」

「ですね。」

信彦がサンドと対峙しようとしたとき・・・

「おい、その小僧！そのサンドは俺達ロケット団の物だ！手を出
すんじゃないねえ！」

ロケット団が乱入。

更に。

「その小僧！そのサンドを我が物にして束縛する気か？解放しろ
！」

別の組織も現れた。

「・・・片方はロケット団ってわかったけどさ、もう片方の人、あ

んた誰？」

信彦は直球に聞いた。

「私はトレーナーから萌えもんを解放するために活躍しているプラズマ団の下っ端だ！」

「・・・一番最悪な状況になったな・・・」

信彦はロケット団とプラズマ団、その両方に遭遇するという不幸極まりない状況になった。

「つかそのサンド、俺が先に見つけたわけだしさ？一応先ずは俺が何かしら権利があってもおかしくないと思うけど？」

「お前に権利はない！そのサンドを解放し、更に手持ちの萌えもんを解放するのだ！」

「いや、俺によこせ！」

「くっ、立ち去ったらこのサンドは手に入れられないし、かといって下手に戦ったら全め・・・あ。」

信彦はあることに気付いた。

ちなみに、当のサンドはなぜか信彦の足元で怯えていた。

「リルカ！二人同時に叩く！やれるか！？」

「大丈夫です！確実な指示を！」

「ほう、俺とやろうつて言うのか？」

「私に勝てるとでも？」

戦闘の意思を見せた信彦に、二人の下っ端は見下したような発言をした。

「はっ、言つてろ！萌えもんの意思も知らずに解放だなんだの言ったりトレーナーから引き剥がしたりするてめえらが許せねエんだよ！」

「そんなことはないね！俺達ロケット団が使えば萌えもんはいいんだよ！」

「萌えもんの意思は自由！トレーナーと一緒にいたいという萌えもんはない！」

「そんなことはねえ！萌えもんにも心がある！恋愛感情だってある！そんな萌えもんがトレーナーからの解放を望む！？そんなバカな話があるかよ！」

もはや激昂して二人に啖呵を切る信彦。

「小僧・・・、言わせておけば・・・っ！」

「許さん！私にバトルを挑んだことを後悔するがいい！」

『行け！（ズバット／コラッタ）！』

ロケットだんの したっぱと プラズマだんの したっぱが しょ
うぶを しかけてきた！

ロケットだんの したっぱは スバットを くりだした！
プラズマだんの したっぱは コラッタを くりだした！

「リルカ、手加減する必要はねえ！この戦い、一気にケリをつける
！」
「はい！」

何故か生まれた2対1。

「コラッタ！『ひっさつまえば』！」
「ズバット！『きゅうけつ』だ！」
「てやー！」
「と、とりやー！」

どこか可愛らしい声を出して突撃してくるズバットとコラッタ。

「リルカ！構う必要はない！潰す形で『サイコネシス』！お前の
思いを伝えてやれ！」
「あなた達の思い違い、私が気付かせてあげます！・・・はああっ
！！！」

突っ込んでくるズバットとコラッタを一度中空で制止させ、そのまま浮上、地面に叩きつけた。

『ぎゃふん!』

「萌えもんにだって、自分のご主人様と一緒にいたいと思うのもいるんです！私もその中の一人！勝手に『解放』だとか取られたりすることが良いわけありません！」

あいての	ズバットは	たおれた！
あいての	コラッタは	たおれた！

「戻れ、コラッタ！くっ、この借りはいつか返させていたどころ！」

プラズマ団の下っ端はコラッタをボールに戻し、踵を返して逃げ去った。

「くっ、この役立たずが！てめえなんか知るか！どこへでも行ってしまえ！」

「そんな・・・」

ロケット団の下っ端はズバットを見捨て、逃げだしていこうとした。

「・・・リルカ、あの不届き物に『シャドーボール』。同時に縛って、ハナダ着いたら警察だ。」

「・・・はい。・・・はっ！」

「（バシュッ！）ぐはっ！！」

見事に『シャドーボール』を当て、ロケット団の下っ端を倒れ伏せさせた。

「・・・ズバット、ごめんね。あれでも君の主人でしょ？君の主人は警察に行くことになるけど、それでもついていく？」

「・・・わっ、わたっ、し、うっ、あ、あの人に、ひっく、捨てられたから・・・、もっ、もう、あの人は・・・、ぐすっ、ご主人様じゃない・・・、もん・・・」

「・・・お前、このズバットは『逃がした』扱いでいいよな？」
「・・・そんな奴、俺の萌えもんじゃねえ。勝手にし（ドゴっ！）
がふっ！？」

下っ端が言いきる前に顔にパンチを食らわせた信彦。

「ご、ご主人様！？」

「てめえ・・・、人の萌えもんは盗んでおいて、自分の萌えもんは弱ければ切り捨てる打あ！？てめえはそれでも萌えもんトレーナーか！？絶対に違うな！てめえがトレーナーだつて言えるなら育てられたズバットが可哀そうすぎるじゃねえか！！」

信彦が下っ端に大声で怒鳴りつける。

過去に大切な萌えもんを失った信彦だからこそ、ズバットの悲しみやトレーナーとしてあるべき姿を人一倍理解しているのだ。

「てめえだけは絶対に許さねえ・・・！」

なおも怒りが収まらぬ信彦に・・・

「も、もうやめてあげて・・・！」

サンドが制止をかけた。

「・・・サンド？」

「こ、この人・・・は・・・、あなたが言うだけじゃなくて、じっくり、は、反省してもらった方が・・・、いいと思うの・・・／＼」

「・・・そうだな。でもま、ハナダまで連れて行くのは面倒だから警察呼んで？」

「あ、はい、わかりました。」

リルカが近くのトレーナーに頼んで警察を要請、警察が来て下つ端は連行されていた。

その間にサンドとズバットの扱いをどうするか悩んでいた信彦。

「さて、まずは捨てられたズバットなんだけど、君はどうしたい？」

「わたしは・・・、あなたと一緒に行きたいな・・・」

「どうして？」

「あなたは・・・、私のためにあそこまで怒ってくれたから。それに、私だけじゃなくて、萌えもんのことをちゃんと考えてくれてい

る人だから。」

「・・・そつか。じゃ、サンドの方は・・・、ごめん、実際に一度
ゲットしていいかな？」

「・・・う、うん・・・」

「・・・あれ？」

サンドを見た瞬間、信彦はある感覚に襲われた。

（信彦：・・・なんだろう、このサンド、どこかで見たことあるよう
な・・・）

サンドをまじまじと見ていた信彦。

「・・・はうう、そんなにじろじろ見ないでくださいよう・・・/
／／」

「おつとつと、ごめんね？変な気はないんだって。なんか、どっか
で見たことあるような気がしてね？」

「・・・多分、初めて会ったと思うよ・・・？」

「そつか。んじゃ・・・、行け、モンスターボール！！」

信彦は一度合意を得ているためモンスターボールをサンドに投げた。

サンドも何か抵抗するわけでもなくすんなりと収まってくれた。

やった！ やせいの サンドを つかまえたぞ！

「よっしゃあ！サンド、ゲットだぜ！」
「ご主人様、おめでとうございます！」
「・・・んじゃ、出てきて！」

サンドをボールから出す。

「名前だけど・・・、ズバットは『クロナ』、サンドは『ユミナ』

でいいかな？」

『は、はい！よ、よろしく願いします、ご主人様！』

「そんな堅苦しくなくていいよ？」

『で、でも、拾っていただけたのですし！』

「・・・ま、いつか。好きに呼んでね。変な呼び方じゃなければいいよ？」

「はい！」

「よ、よろしく願いしますう・・・／＼／」

クロナとユミナを仲間に加えた信彦はそのままオツキミやまを抜けた。

途中、化石もしっかり貰ったりもした。

「ふう、なんかいろんなことがあったけどさ、どうにかオツキミやま突破―！」

「次はジム戦、かな？かな？」

「まだ早いつて。先にマサキさんところ行って萌えもん見してもらわなきゃ。」

「図鑑の一部完成を目指さないといけませんしね。」

「つと、その前に申請申請・・・」

「あ！」

雑談しながらもとにかくハナダシティの町中に向かっていった面々だった。

T
o

t
h
e

n
e
x
t

S
t
o
r
y
:
:
.

手持ち萌えもん：信彦

正規メンバー

ミナ（リザード♀）
なきむしな性格

Lv.25

技 ひっかく

メタルクロー

ひのこ

えんまく

おまけ：ズバットが嫌い。だが、クロナは・・・？

アミ（エアームド♀）

いちずな性格

LV・23

技 前回と変わらず

おまけ：浮気疑念を抱きやすい子に。

アイ（フシギソウ♀）

てんねんな性格

LV・24

技 たいあたり

ねむりごな

はっぱカッター

つるのムチ

おまけ：どこか百合的感覚の物に引かれやすい傾向あり？

リンカ（ヘルガー♀）

いちずな性格

LV・24

技 ひのこ

かみなりのキバ

すなかけ

とおぼえ

おまけ：進化してより女の子らしい体つきになった。

ユイカ（グラエナ♀）

いちずな性格

Lv・24

技 前回と変わらず

おまけ：リンカの進化により、自分がより貧乳になったことにまだ気づいていない。

ユミナ（サンド色違い♀）（漢字で書くと『優美奈』）

ひとみしりな性格

Lv・10

技 ひつかく

まるくなる

すなかけ

none

おまけ：信彦が初めてゲットした萌えもん。

よく顔を赤らめているが、それは恥ずかしがっているだけ。

控え萌えもん

リルカ（サーナイト♀）

Lv・73

技 前回と変わらず

おまけ：今回ユミナの参入により、控えに。

クロナ（ズバット♀）（漢字で書くと『黒奈』）

けんきよな性格

L v . 1 2

技 きゅうけつ

ちようおんぱ

かみつく

n o n e

おまけ：ロケット団の下っ端に捨てられたその後に信彦に拾われた。
信彦の優しさや想いに触れて、ついていくことを決心。

S t o r y 9 オツキミやまでの戦い、信彦の怒り（後書き）

補足事項

サンドは『萌えもん 鹿』の通常版サンドとさせていただいて下さるとありがたいです。

次回、S t o r y 10 『二つの申請とライバルとの戦いとゴールデンボールブリッジ先での戦いと出会い』、お楽しみに！

Story 10

2つの申請とライバルとの戦いとゴールデンボールブリッジ

Story 10です。

久しぶりに春樹が出ますが、まあ、『お前なあ……』となります。

ゴールデンボールブリッジを突破します。

信彦に緊急事態が！

では、どうぞ！

ハナダシティ・萌えもんセンター。

「では、ここにお名前と申請したい内容を記入してください。」

「あ、はい。……えっと、過剰保持許可と、除外対象自由変更許可……っと。はい、これで。」

「では、今日はセンターに泊まってください。翌朝お渡しいたしますので。」

「あ、はい。わかりました。」

許可申請をとり、一旦萌えもんセンターを出る信彦。

「それじゃ、メンバーを確認するね。初回除外対象は、リルカとクロナ。」

「わ、私、除外ですか？」

「あくまで一時的に、ね。誰かが不利かな、と思ったら適宜入れ替えていくし、本気で行くときはリルカをずっと出せるようにしたいしね。今回は一時的なもの。」

「……ということは……。」

アイが信彦の眼を見て言う。

「そ。スタメンはミナ、アイ、アミ、リンカ、ユイカ、ユミナ。と

りあえず今日はまだ日が暮れるまで時間があるし、マサキさんとこまで行く?」

「そうですね。今日はハナダの岬を目指しましょうか。」

「そうだね。マサキさんならきつと萌えもんのデータ持つてるし。」

「それじゃ、24番道路目指して出発!」

信彦が出発の合図をした後、リルカ以外をボールに戻し、歩き始めた。

そして、ゴールデンボールブリッジに差し掛かろうとした瞬間・・・

「よお、信彦じゃねえか！」

「げ、春樹かよ・・・」

春樹がゴールデンボールブリッジの方から歩いてきた。

「お前さ、一体どんだけ萌えもん集めた？俺は40匹も集めたぜ？お前の図鑑見せてみるよ！」

「やだね。面倒だし俺は先に行きたいし。」

「そんじゃ、力ずくだ！」

こうして春樹と信彦の戦いが始まった。

「いけ、ピジョン！」

「・・・行きます！」

「電気タイプや氷タイプ、岩タイプがない……。だったら！
いけ、リンカ！」

「はい、マスター！」

リンカがボールから出た。

「ヘルガーか！いつ手に入れたんだ！？」

「頑張つて育てた。それ以外にあるかよ！」

「まあいい、『かぜおこし』！」

「避けて『ひのこ』だ！」

「はああっ！」

「そんな風、当たりませんよ！というか、速さが足りませんよ！」

『かぜおこし』を軽々と回避し、『ひのこ』を放つリンカ。

「熱い、熱い！」

「私の方が早いです！あなたなんかには負けませんよ！？」

「くっ、だったら『でんこうせっか』！」

「受け止めて叩きつけるんだ！」

更に指示が飛ぶ。

「だっ！」

「うつ、くうつっ!!」

『でんこうせっか』を受け止め、そのために足が引きずられたリンス力。

「でやああああっ!!」

「がっ!?!」

そのまま巴投げの要領でピジョンを地面に叩きつけた。

「あ・・・が・・・」

ピジョンは叩きつけられた衝撃で呼吸困難になっていた。

「くっ、戦闘不能!? 戻れ!」

春樹は呼吸ができず悶え苦しんでいるピジョンをボールに戻し、すかさず次のボールに手をかける。

「いけ、ユンゲラー!」

「・・・」

（信彦：無口な性格か？あいつ、なんにも言わねえし・・・）

信彦はユンゲラーを見てそう思った。

「だが、ユンゲラーなら・・・いや、さっきの戦いでリンカはダメージがある・・・。リンカ、戻れ！入れ替わりでユイカ！」
『はい！』

リンカがボールに戻り、ユイカが代わりに出る。

「ちっ、そこでグラエナかよ！」
「それが戦略というものだよ、春樹君？」
「ほざけ！『めざめるパワー』！」
「避けて噛みつけ！」
「はい！」

ユイカは迫る『めざめるパワー』を意ともせず突っ込み、二ビジュムでやったように噛みついた。

「・・・くっ・・・」

「ふああ！ふおのふああふああおふいふあふを！（訳：さあ！このまま倒しますよー！）」

「あ……ぐ……う……」

ガジガジと牙を立てるユイカの噛みつきに力なく膝をつくウンゲラ
ー。

「……も、もう……だめ……」

そのままウンゲラーは戦闘不能になった。

「またか！？なんでそんなに強いんだよ！？」

「今までのくろ「私とマスターの愛です！」違うから！絶対違うか
ら！違うとしか言わないからね！？」

信彦に抱きついてまで信彦の言葉を締めたユイカ。

「くっ、このままじゃ勝てねえ……！だったら……！あばよ！」

「あ、逃げるのかよ！？ま、別に逃げるならいいんだけどね。」

とつと逃げだした春樹を見送る形で立ち尽くす信彦。

「……ま、いつか。さつさとマサキさんとこいこーぜ？このト
レーナー全滅させてさ。あ、でもいちいち戦って行ったらめんどく

さいしな・・・」

「だいじょーぶ！私とマスターがいれば！」

アミが自信満々に言う。

「・・・というかいつ出てきたの？」

「さつき！ねエマスター、私に戦わせてよぉ・・・」

甘えた声で信彦に戦いたいとせがむアミ。

「・・・全勝できる？」

「できるかできないかじゃないの！やる気と愛の問題なの！」

「愛関係ないんじゃないかな？・・・まあ、大丈夫ならいいけど。

それじゃ、全部行きますか？」

「うん！」

ゴールデンボールブリッジを突破するためにアミが向かう。

結果。

4戦目までは・・・

「私とマスターの道を塞がないでー!!」
『ぴぎゃあああああ!!!!』

アミがトレーナーの萌えもんを全滅させていた。

「よし、次がラストだ！」

「うん！」

そして5人目に向かう。

「きえーい！俺が5人目だあ！」

『ださっ！？』

信彦とアミが同時に同じことを言った。

「ぐふあっ！？」

こうかは ばつぐんだ！

トレーナーの心に大ダメージを与えた。

「・・・まあ、戦う？」

「・・・俺の・・・、負けだぜ・・・」

あっさり勝利した。

「・・・んー、なんかしっくりこないけど、まあ、勝ちか勝ちか。さって、後はあの人だけど、どうなんだろう？」

「さあ・・・」

そして最後の人に話しかけた。

「おめでとう！商品として『きんのたま』をあげるよ！」
「あ、ありがとう・・・」

いきなり『きんのたま』を渡され、困惑気味の信彦。

「ところでさ、話なんだけど、君、ロケットだ「断る。」なんで？」
「ロケット団に入るかっての！あんな集団に！」
「君、ホントに入らないの？」
「入らない！」
「入ってよ。」
「嫌だ！」

「入れよ！」

「だが断る！」

「本当にはいらねえ気だな……。だったら無理やり入れてやる！」
「させるかよ！」

ロケットだんの したっぱが しょうぶを しかけてきた！

「いけ、アーボ！」

「よし、行け！ユミ……」

「アーボ！その池にいるチョンチーを掴んで来い！」

「はい！」
「なっ!？」

ロケット団の下っ端は、こともあるつか近くの池にたまたまいたチョンチーを盾にしたのだ。

「きゃあああ!!」

抵抗できるわけもなく、ずるずると引き上げられたチョンチー。

「はっはは!こいつを無事に解放してほしいりや仲間になりな!」
「・・・腐ってやがる・・・どこまでも腐ってやがる・・・!」
「いや・・・、やめて・・・、離して・・・!」

アーボが盾にしているチョンチーは必死に抵抗しているが、一行に離れる気配はない。

「ユミナ、今回は我慢してくれ・・・。あのチョンチーを助ける為なんだ・・・」
「あ、うん・・・」

ユミナを戻し、その代わりに・・・

「リルカ、頼む。チョンチーを傷つけずにアーボを倒してくれ・・・」
「わかりました。チョンチーを助けてアーボを倒すのですね？」
「ああ・・・」
「では・・・」

代わりにリルカが参戦。アーボを睨みつけた。

「な、なんだよ、僕とやろうつていうの？いいのかい？僕と戦った
らこのチョンチー死ぬよ？」
「た、助けて・・・」

アーボに捕まったまま、ぷるぷると怯えてしまつて震えているチョンチー。

「チョンチー、安心してください。あなたが死ぬことはないんです。
ただ・・・」

一拍置いて・・・

「倒れるのは、あなただけです、アーボ！」
「ひっ!？」

強くアーボに言い放った。

そのアーボは怯んでしまった。

「リルカ！そのアーボだけに『サイコキネシス』！」

「はあああああつ！！！」

「ぎゃあああああああ！！！」

「~~~~つ！！！」

放たれた『サイコキネシス』はアーボだけに直撃し、チョンチーには何もなかった。

「あ、アーボ！？」

下っ端も何が起こったのか全く分からない、といった表情を浮かべていた。

「さあ、さつさと消えろ！二度と俺の目の前に現れるな！」

「ひ、ひいいい！！！」

下っ端は尻尾を巻いて逃げていくような形で走り去って行った。

「・・・ふう。チョンチー、大丈夫だった？ケガしてない？」
「だ、大丈夫・・・／＼／」

助けてもらったことと信彦のかっこよさ（本人無自覚（笑））に惚れたチョンチー！。

「さつてと、俺達行くから。」

と言って行こうとしたら・・・

ひしっ。

「・・・ん？」

チヨンチーが信彦の服を掴んでいた。

「どつたの？」

「私も・・・、一緒に行きたい・・・／／／」

「一緒に？いいの？家族とかは・・・」

「お母さんとかはいないし、それに・・・／／／」
「それに？」

ちよつとうつ向き気味に言うチヨンチー。

だが、何かに意を決したかのように信彦の方を向き・・・

飛びつき・・・

「んっ！？」

キスをした。

『ええっ！？』

無論、萌えもんたちも驚きを隠せない。

「・・・これが・・・、私の気持ちなの・・・。あなたが・・・、好き・・・／＼／」

抱きつかれ、キスされた信彦は・・・

「・・・（プシュ・・・）」

フリーズしていた。

「ご、ご主人様！？気を失わないで！？」

アイがすかさずボールから飛び出し、信彦のフリーズの解除を始めた。

更に。

「ちょっと！『私の』マスターに何してるのよ！」

「・・・キス・・・／／」

「『私の』なんだから！」

「ちょっとアミ！私のです！」

「リンカも違いますよ！私のです！」

言い合いを始めたアミ・リンカ・ユイカ・チョンチー。

「え、えつと、ま、ますたあ？大丈夫？」

ミナはただ一人、なにをしたらいいのかが分からずただ信彦に大丈夫か聞くだけだった。

「ご、ご主人様って女の子に免疫ないの！？」

クロナはただただ驚き、

「き、きき、きききス．．．、ど、どんとこいです．．．／／／」

ユミナは妄想世界にトリップしていた．．．

数分後、チヨンチーのキスによるフリーズから復活した信彦。

「・・・ご主人様、大丈夫ですか？」

「ダメ、まだドキドキしてるって・・・／／／」

「突然でしたからね・・・」

その後、リルカがしっかりとゲットしておいたため、リルカ以外はボールに戻っていた。

チヨンチーはアイにより『ルミナ』と名付けられた。

「・・・もうちょっと置いとかないと、まだ体が・・・」

「あ、あの、ご主人様・・・。その、えっと・・・／／／」

リルカが突如としてもじもじします。

「・・・りるか？まさか？」

「は、はい・・・。差し出がましいですけど・・・。／＼」

「・・・ごめん、今さらたら二日くらい固まったままになるかも・・・。だから、暫くはご免、ね。」

「は、はい・・・。／＼」

ちょっとした会話を交わし・・・

「うー、まだふらふらしてる・・・。でも萌えセン戻らないと・・・

」

「ああ、無理してはいけませんよ・・・。」

リルカに支えられながらも萌えもんセンターに向かう信彦。

今日一日でかなり疲労したのだと思われる。

T o t h e n e x t S t o r y . . .

手持ち萌えもん：信彦

正規メンバー

ミナ（リザード♀）

データ前回と変わらず

おまけ：相変わらず恋愛に疎い。

信彦のフリーズの原因にも？が浮かんでいる。

アミ（エアームド♀）

データ前回と変わらず

おまけ：ルミナのキスに信彦は『自分の物だ』と主張。

ルミナの強行キスに嫉妬、どうすれば信彦にキスしてもらえるかに迷いだす。

アイ（フシギソウ♀）

データ前回と変わらず

おまけ：自分の行為をおしとどめても信彦の復活に尽力。

だけどあのキスには驚いた。

リンカ（ヘルガー♀）

データ前回と変わらず

おまけ：ルミナのキスに信彦は『自分の物だ』と強く主張。

決して通るわけではないが。

ユイカ（グラエナ♀）

データ前回と変わらず

おまけ：ルミナのキスに信彦は『自分の物だ』と一番強く主張。

決して通らないが。

ユミナ（サンド色違い♀）

データ前回と変わらず

おまけ：割と妄想壁なところがある？

非正規メンバー

リルカ（サーナイト♀）

データ前回と変わらず

おまけ：ルミナのキスに驚きはしたものの、そこは自嘲した。

だが、やっぱり自分の恋愛感情は我慢できず、やっぱりキスしたがってしまう。そこはやっぱり女の子。

クロナ（ズバット♀）

データ前回と変わらず

おまけ：信彦の女性免疫のなさに驚愕。

キスに関しては無関心。

ルミナ（チョンチー♀）（漢字で書くと『璫美奈』）

Lv.13

ヤンデレな性格（尽くす、という意味での）

技 みずでっぽう

でんじは

あわ

none

おまけ：信彦に助けられたことで惚れ、そのまま信彦のファーストキスを奪った。

がる子。

リルカと同等なレベルで思いが強く、大変なことやりた

Story 10

2つの申請とライバルとの戦いとゴールデンボールブリッ

今回、かなりぶっ飛んだのではないかと思いました、自分で。

次回、Story 11『マサキとの出会い、ブルーとの出会い・・・？』、お楽しみに！

信彦の過去を書いた、番外編も、合わせてどうぞ。

Story 11 マサキとの出会い、ブルーとの出会い・・・？（前書き）

タイトル通りです。いやホントに。

今回はどこか懐かしい台詞がちらほらとあります。

では、どうぞ！

Story 11 マサキとの出会い、ブルーとの出会い・・・？

「どえああああああああっ！！！！！！」

信彦は段差を飛び越え、24番道路の本来の戻り道を走り続けていた。

理由は二つ。

1つは、昨日の遅れを取り戻したいから。

ルミナがしたキスのためにフリーズし、残り時間をかなり無駄にしまい、その分の遅れが発生してしまったからだ。

もう一つは至極簡単。

戦闘を回避したかったからだ。

「う、ご主人様、そんなに走られたら・・・」

リルカはそんな信彦を追いかけるように走っていた。

「こっ、これくらいっ！しとかなきゃ！春樹に負けるだろうがよ！」

「で、ですが・・・」

「だっ！着いた！」

岬の小屋へ到着。

かかった時間は、僅か15分（萌えもんセンターから走り続けて）。

「よ、よっし、ま、マサキさんここに、は、入る・・・か・・・」

「ま、まずは息を整えてから・・・」

リルカに諭され、物凄い荒れた呼吸を整える。

「・・・よし、行くか！」

そしてマサキの家、岬の小屋に入った。

「こんにちは・・・」

信彦が入った時に見たのは・・・

「萌えもん？」

だった。

「こんにちは！僕萌えもん・・・ちやうわい！ワイはマサキや！」

「あのポケモン好きで有名な・・・？」

「ほ、本当ですか・・・？」

実際にはマサキだった。

「信じとらんな？本当や！萌えもんの転送システムを作ったのはワイや！転送システムの調整中に閉じ込められて萌えもんと合体してしもうたんや！」

「は、はあ・・・」

「それで・・・？」

「頼みがあるねんけどな？ワイがそのマシンに入った後にそのボ

タンを押してほしいんや！頼んだで！」
「は、はあ……」

マサキはマシンに入って行った。

「ボタンって……、これだよな……」
「た、多分……」
「んじゃ……、ポチつとな！」

信彦がどこかで聞いたことがあるようなセリフでボタンを押し……

ガチャ！

ガタン！

ガシヨン！

ウーン・・・

プシュー・・・

「はー、ほんま助かったわ！ありがとな！」

「ど、どうも・・・」

「そや、お礼と言っちゃんやけど、このチケット貰ってーな。」

「これは・・・サントアンヌ号の乗船チケットじゃないですか！？」

「せや！ワイはパーティーとか好きやないからな、代わりに行って楽しんできいや！」

「あ、ありがとうございます！あ、ついでに萌えもん見せてもらえますか？」「せやな・・・、だったらワイのパソコンを見てみ？ワイのお気に入り萌えもんが見れるで！」

「あ、ありがとうございます！」

信彦は嬉々としてパソコンを見た。

「ほー、これがイーブイ・・・、2番道路で見たけど・・・。これ

がサンダースで、こっちがシャワーズ・・・、そしてブースター・・・」

「お気に入りというのも頷けますね。」

「あ、ありがとうございます！」

信彦はマサキの家を出て、ハナダシティに戻った。

帰りにまたまた走ったのは余談である・・・

「・・・うん、まだカスミには勝ち目がないかもしれないからさ、先にクチバ行く？」

「ですね。・・・あそこにロケット団がいるような気が・・・」

「よし潰す!!」

あつさりと『潰す宣言』をした信彦。

「ご、ご主人様？」

「すみません、そこ、通っていいですか？そこになんか怪しい人がいたんで。」

「あ、多分大丈夫かと。」

「んじゃ、素通りしまーす。」

あつさりと民家を通って行く信彦。

「・・・いたいた。あのー、その怪しい人？」

「え、俺のこと？俺はぜーんぜん怪しくないよ？」

「・・・マジで怪しいですけど？」

「・・・怪しい？」

「うん。」

「・・・ちくしょーっ!!」

勝手にバトルを開始したロケット団下っ端だが・・・

「・・・参りました。盗んだ技マシンは返しますから許してください・・・」

「・・・だったらさっさと消えて？」

「は、はい！！！」

あっさりと逃げ、その先で何か捕まった下っ端を見送り、先に進んだ。

「ま、ますたあが怖いよ・・・」

ミナはボールの中で涙目になっていた。

「さて。ハナダジムすつ飛ばして5番道路に来たけど・・・」

「ご主人様、道具は問題ありませんか？」

「んー？道具？えと、『まんだんのくすり』でしょ？『なんでもなおし』でしょ？」

「あの、ご主人様、さすがに前の冒険で手に入れた道具を持ち込むのはどうかと・・・」

「・・・ごめん、これ切り札だった。『キズぐすり』はあるし、各種状態異常治療道具はあるし・・・。あ、『モンスターボール』はないか・・・」

「ボール、買いに行きます？」

「いや、まだ大丈夫だって。それと、『ヨクアタール』も・・・あつ！？」

手から滑り落ちてしまう『ヨクアタール』。

「ちよっ！やべ、あのままじゃ溝に落ちる！？リルカ、超能力範囲対象！？」

「範囲対象外です！！」

「せっかく拾った『ヨクアタール』がああ・・・」

と泣き崩れる信彦だったが・・・

シピュン！

異常な速さで『ヨクアタール』を手に取り、戻ってくる萌えもんが。

「はい！」

「あ、ブルー……。ありがとね。」

野生とはいえ、拾ってきてくれたことに感謝の意を込めて、信彦はブルーの頭をなでた。

「ふにゅ……。♪」

ブルーも決して嫌がる行動をせずにされるがままに頭をなでられる。

「それじゃね。俺達行くから。」

信彦が先を行こうとしたら・・・

「やゝ!」

ブルーがいきなり抱きついてきた。

「うおつと?」

「行っちゃやだぁ・・・。一人にしないでよぉ・・・。」

服を掴み、涙目で訴えるブルー。

「・・・参ったなぁ・・・。」

「ボール、無いんでしたよね・・・?」

「そうなのわけ。さっき『キズぐすり』とかたくさん買ったからさ? お金も無いんだよね・・・。」

「だから、ご主人様をご主人様とできないのです。ブルー、ごめんなさい・・・。」

「・・・ついてく!」

「へ?」

ブルーの発言に目を丸くする信彦とリルカ。

「つ、ついていくって・・・」
「ついてくのー!!」

駄々をこね始めるブルー。

「・・・仕方ないや。しばらくついてくるだけだからね？」
「うん!!」

途端に元気になるブルー。

「名前は・・・どうしようっ？」
「さあ・・・？」

悩みだす二人。

「・・・そうだ、『ユウカ』、でいいかな？」
「うん!!」

ユウカが着いてくることになった。

だが、その時・・・

カタカタカタカタカタカタカタカタ！！！！

「あ、アミ？リンカ？ユイカ？」

三人を一気に出したら・・・

『マスター！！その子じゃなくて私を可愛がって（ください）！』

「可愛がる関係ないからね！？」

『私がマスターの一番のパートナー（なの／です）！！』

アミたちはもう信彦に詰めかかるが・・・

「ダメ！詰め寄っちゃダメ！」

ユウカが信彦の前に立った。

そして追い打ちをかけるように・・・

「ご主人様あ・・・、私、捨てられちゃうの・・・？」
「捨てないからね!？」

必死になってしまった信彦だった。

T o t h e n e x t S t o r y . . .

手持ち萌えもん：信彦

正規メンバー

ミナ（リザード♀）

データ前回と変わらず

おまけ：一番信彦にとっての癒し的存在になっている。

アミ（エアームド♀）

データ前回と変わらず

おまけ：ユウカに嫉妬した。信彦の正規パートナーは自分だと真っ先に主張。

アイ（フシギソウ♀）

データ前回と変わらず

おまけ：今回出番なし。

リンカ（ヘルガー♀）

データ前回と変わらず

おまけ：ユウカに嫉妬した。信彦の正規パートナーは自分だと遅れて主張。

ユイカ（グラエナ♀）

データ前回と変わらず

おまけ：ユウカに嫉妬した。信彦の正規パートナーは自分だとさらに遅れて主張。

ユミナ（サンド色違い♀）

データ前回と変わらず

おまけ：今回出番が無かった。

非正規メンバー

リルカ（サーナイト♀）

データ前回と変わらず

おまけ：ユウナが凄いいべたべたしていたが、どこかしら余裕を見せていた・・・？

クロナ（ズバット♀）

データ前回と変わらず

おまけ：今回見たロケット団に少なからず敵意を抱いていた。

ルミナ（チョンチー♀）

LV：13

ヤンデレな性格

おまけ：ユウカが仲間に加わったことで、捨てられるのじゃないのかと勘違い。

その他

ユウカ（ブルー♀）（漢字で書くと『優花』）

Lv.10

デレデレな性格（極度の甘えん坊）

おまけ：信彦になぜか勝手に恋し、ついてきたがる。

アミたちの嫉妬対象。

S t o r y 11 マサキとの出会い、ブルーとの出会い・・・？（後書き）

今回一番苦労したのは、マサキの関西弁です。

住んでいるのが関西圏ではないので、相当苦労しました。

次回、S t o r y 12 『災いと落龍』、お楽しみに！

S t o r y 12 災いと落龍（前書き）

タイトルがなぜか意味深なものに感じたS t o r y 12です。

災いとは？落龍って？

それは本文を読んでのお楽しみ、ということ。

Story 12 災いと落龍

ユウカが着いてくるようになって。

ハナダとクチバを結ぶ地下通路を抜け・・・

「そのまま6番道路に着いた・・・んだよね？」

「6番道路・・・ですね。」

「ふにゅ・・・」

信彦とリルカは『・・・何があつたの？』みたいな顔をして、ユウカは何の気もなしにひつついていた。

「・・・ねえ、そろそろ離れ「や!」・・・てほしかったんだけどなあ・・・」

信彦はすでに何度目であろうか、ユウカに離れてくれるように頼んだが、『嫌』の一蹴。

「はあ・・・。・・・ん?」

「どうかしました?」

「いや、ほら。そこに・・・」

信彦が指をさしたところには・・・

「アブソル・・・ですね。」

「あ、アブソルって、災いを呼ぶって言われてる・・・」

信彦の足元で震えながらユウカが言う。

「いやいや、アブソルは災いを察知する力があるだけ。災いを察知してそこに向かうわけだから、そう思われたり言われたりするだけなんだよ。」

「でも、アブソルがここに来たってことは、何かここで災いが起きる、ということでしょうか・・・?」

「さあ・・・？」

信彦とリルカがひそひそと話していた時、アブソルは近くに歩み寄ってきた。

「・・・あのさ、あなたになんだけど。」

「俺？」

「そ。あなたに災いが起こるよ。空から龍が落ちてくるの。」

「龍が落ちてくる！？」

「そう。どの龍が落ちてくるのかは分からないけど、確実にあなたに落ちてくるって察知したの。それと、その龍、女の子だから。」

「はうっ！？」

アブソルの予告に思わず上ずった声をあげてしまっリルカ。

「リルカ？どうした？」

「にやっ、にやんでもありません！」

「・・・かみかみだよ？」

「はうあっ！？」

ユウカにも指摘され、更に顔が赤くなった。

「・・・それと、その龍が原因で戦うことになるから。『黒ずくめの男』と。」

「『黒ずくめ』・・・!？」

信彦は『黒ずくめ』という言葉に反応。

「・・・なるほどな。リルカ、その黒ずくめが出たら多分・・・」

「多分・・・？」

「ロケット団、だね。」

「・・・では、力量差を見せつけて追い散らせばいいのですね？」

「・・・だが、空を飛ぶ龍を追うといえば相当強い萌えもんを準備してるはずだから、決して手を抜かないでね？」

「手は・・・抜きません！」

「それと、多分俺はその龍に潰されているかもしれないから、リルカの判断で戦ってくれない？」

「あー・・・、わ、わかりました・・・」

信彦がリルカに向かってそういったその瞬間。

「・・・あのね？今ね？お空が暗くなったなあ・・・って思ったんだけど・・・」

ユウカがそう言った。

「ま、まさか、こんなすぐには・・・」

リルカがちょっと焦りながらそう言ったが・・・

「・・・羽音・・・、上か！やっぱし！ってかあれボーマンダ！？」

そして足元に影が差し、そのボーマンダは急に失速して・・・

体が傾き始め・・・

「落ちてきたああああっ！！！！（ドスン！）ごふあっ！！！」

そして、そのまま信彦と激突した。

「・・・つつ・・・っ！？リルカ、周囲を警戒！」

「はっ、はい！」

「このボーマンダ、縛り痕に打撲痕、それに各所にある青痣・・・、
どうかで一回捕まって、暴行されて・・・、最悪精神的にも半分死
んでるかもしれないな・・・」

「・・・ご主人様！予測通り、ロケット団が！」

リルカが言う通り、遠くにロケット団の姿が。

「リルカ、ホルダーからアイとミナとユミナを・・・」

「は、はい！ミナ、アイ、ユミナ、ご主人様がお呼びです！」

信彦の言葉を聞き、ミナとアイをボールから出すリルカ。

「ま、ますたあ、なにをしたらいいの？」

「そ、そうだよ・・・」

「3人に選択！リルカと共闘してロケット団と戦うか、このボーマ
ンダを俺からどかす！どっち！？」

「ど、どかす！」

「わ、私も！」

ミナとユミナはボーマンダをどかす側につく。

「だったら私はリルカと一緒に戦う！」

アイは迫りくるロケット団と、リルカと共に闘うことを決意。

「よし！行動開始！」

『はい！』

気合の入った返事と共に、アイはリルカの許へ、ミナとユミナはボーマンダの腕と脚を持ち上げた。

「せえっ……のっ！！」

「よいつ……しょっ！！」

二人でボーマンダを持ち上げようとするものの、いかんせんボーマンダの体重は重いためにほんの少し浮き上がるだけとなり、どこすに至らない。

「ます……たあ……う、う……ける……？」

「……もうちょっと上げられる！？」

「がんばって……みるう……」

僅かしか持ちあがらないために、動くにも動けない信彦。

「だけと、腕が自由になった！クロナ、二人を助けてくれ！」
「わかった！」

ボールからクロナを出し、ボーマンダの腹を下から押し上げ、少しでも二人の力にさせようとした。

その頃、アイとリル力は……

「おうお前ら！俺達は泣く子も黙るロケット団！痛い目に遭いたくなけりやそこをどきな！」

ロケット団と対峙していた。

「あなたは……、あなたはっ！なぜあの子をそこまで執拗に

追いまわすのですか!？」

「そうだよ!あの子が可哀そうだよ!」

リルカとアイはロケット団に『なぜあんなことをするのか』を聞く。

「そんなもん、簡単な話だよ!あいつを売るんだよ、奴隷としてな
!」

「どっ……」

「バカな……、ことを……!」

「わかりきったことを聞くんじゃないやねえよ!」

ロケット団の放った一言は、リルカの怒りのスイッチをONにするには十分だった。

「あなた達は……、絶対に許しません……!」

「許さなくてもいいぜ?逆に『許してくれ』というのはお前らなんだからよ?」

「ははっ、だったらこいつらも奴隷としようぜ?」

「そりゃいい!だったら身体に傷つけたら駄目だな!」

傍から見れば気持ち悪い笑いを見せる二人の下っ端。

「……下衆が……!」

ついにリルカの口調が変わった。

「り、リルカ？」

「アイ、あの二人は完膚なきまでに叩く！」

「は、はいい！！」

リルカの気迫に怯えるアイは、半泣きで戦いを始めた。

「お前の声なんて怖くねえんだよ！行けクロバット！」

「雑魚は私に倒されるのが当然なのよ！！」

「行つて来いマタドガス！」

「私に敵うのかしらあ？」

明らかに調子づいているクロバットとマタドガス。

だが、後にその二匹は戦いにトラウマを持つほどの恐怖を得るのだ
った。

信彦達は・・・

「わっぷ！？ちよ、ミナ！もつと上にあげて！ボーマンダのおっぱいが顔に当たってっ！ぷはっ！」
「ご、ごめん！」

クロナがミナに文句を言う。

信彦救出作業は難航していた。

が。

「あと・・・、腕だけ・・・だ・・・っ！」

少しずつだが脱出できている信彦。

「・・・おし、抜けた！ゆっくり下ろしてあげて！」

『は、はい!』

「俺はこのままリルカとアイに指示を出しに行く!皆はこの子を介抱して!」

信彦はそのままリルカ達のところへ走って行った。

「・・・この子、本当にスタイルいいなあ・・・」

何気なくユミナはボーマンダのスタイルの良さを羨ましがっていた。

「リルカ!」

「ご主人様!?!」

「ご主人様あゝ・・・」

信彦の登場に驚くリルカと泣きつくアイ。

「指示権を戻す!相手は!?!」

「クロバットLv・43とマタドガスLv・43、一匹ずつ!」

「蹴散らす!それくらいならリルカだけでも十分!」

「はい!」

今まで信彦がいない状態で、アイに指示を出しながら自分でも戦つというある意味器用なことをしていたリルカ。

その相手であつた2匹は・・・

「くっ、こ、こんな、ざ、雑魚、に・・・げぼっ!」

「こ、このままじゃ、ま、負けちゃうわねえ・・・」

ピンチになっている。

「リルカ、『シャドーボール』!」

「・・・あああっ!」

僅か3秒という短い時間でリルカの目の前で出来上がった影の塊は、均等に二つに分かれ、寸分の狂いも無く二匹に直撃した。

「あっ・・・、がつ・・・」

「あふう・・・」

そして、圧倒的な特攻値の高さにより、一気にHPを失った二匹はへろへろになって地に倒れ伏した。

「くっ、戻れ！」

「畜生！覚えてろ！？」

そして、下っ端たちは悪党がよく言い残すセリフを吐きながら走り去って行った。

「よし、ボーマンダを萌えセンに連れてくよ！」

「は、はい！」

「リルカ、この状態で戦いを挑んだ相手には全力で挑んで！手加減する必要なしで！」

「わかりました！」

ボーマンダを抱きかかえ、信彦はクチバシティまで一気に走り始めた。

この間、一人のトレーナーと眼があつたが、

「・・・そのボーマンダ、傷ついているんだね。さっさと行きなよ。戦わないから。」

と、あっさりと通してもらえたりもした。

「このボーマンダ、お願いします！できればボール式じゃなくて病室看病で！」

「は、はい！わかりました！」

信彦が駆け足で萌えもんセンターに入り、治療を要請。

トレーナーが信彦以外誰もいない萌えもんセンターは、大騒動となった。

そして、大騒動が一段落して。

「今回運ばれたボーマンド、あなたの萌えもんではない・・・のですね？」

「はい。自分の萌えもんだという証明に身体のだどこにある輪、いわゆる『隷属証』ですけど、それがどこにもなかったんです。ロケット団に追われてましたが、『一度捕まえたような雰囲気』ではなく、『今から捕まえる』という雰囲気でしたし・・・。。でも、なぜ？」

「実は・・・、やはりここに運ばれる前のことが非常に辛かったのか、目が虚ろで『誰もかれも近付けたくない』という感情や行動が目立つんです。」

「・・・肉体的、精神的に苦しんできたんでしょうね・・・。」

ボーマンドのことで信彦とジョーイ（クチバシティ）は話しこんでいた。

「ご主人様、やはりあの子は・・・。」

「・・・一度も捕まっていなかったね。捕まえた証明も無いし、縄の痕や痣も各所にあつたから、ボールじゃなくて網か何か罫で捕まって、そのまま連れてかれた、というのが推測だよ・・・。」

「では・・・」
「・・・彼女が心を開くんだったら、信頼できる人じゃないとね・・・」
「・・・ご主人様？　いたいどちらへ？」
「あの子と話せないかな、って。」
「・・・お気をつけて・・・」

信彦はただ一人ボーマンダがいる病室に向かった。

病室。

カチャ。

「・・・誰？」
「ただのお人よしな萌えもんトレーナー。」
「何の用？」
「君と話しに来たんだ。まあ、何も話したくなければ話さなくていい」

いけどね。」
「・・・」

少しは警戒を解いたらしいものの、それでも警戒色はつきりしている。

「大丈夫。君には何もしない。」

「・・・ホント？」

「うん。そして、君を助けたいな、って。」

「・・・ホン・・・ト・・・？」

信彦が告げる本心に、僅かながら、しかし確実に心を開きつつある
ボーマンダ。

「うん。ただ、それだけ。話したくないんだったら出て行くけど・・・」

と言って立ち上がったとき・・・

きゅっ・・・

「私のこと・・・、助けて・・・、くれる・・・の？」

「できる限り、だけど。」

「・・・ふえっ・・・、ふええ・・・」

「・・・泣きたいなら、泣きなよ。俺は傍にいるからさ。」

「うええええん！！ひつく、ふえええええん！！」ポーマ^ダは信彦の胸を借りる形で、泣いた。

一階では・・・

・・・ええええ・・・

「・・・ご主人様、あの子の心を開いたんですね・・・」
「す、凄いですよ・・・！さっきまで頑なに人を拒んでいたあの子を・・・」

「それがご主人様なので。」

リルカとジョーイ（クチバシティ）がそんな話をしていた。

「・・・ぐすつ・・・」

「落ち着いた？」

「うん・・・」

ようやく泣きやんだボーマンド。

「・・・あのね・・・？」

そして、話を切り出した。

「・・・無理に話さなくてもいいよ？」

「いいの・・・。あなたに助けられる前なんだけど・・・、私、口ケット団に『捕縛』されてたの・・・。」

「『保護』や『捕獲』じゃなくて？」

「そうなの・・・。この縄の痕もそのせい。それに、逆らったら殴られたし、電気も・・・浴びせられた・・・。」

「・・・そして、最終的に身体も求められた、とか・・・も？」

「・・・（コクッ）」

俯きながらも肯定の意を示す頷きをするボーマンド。

「最初は・・・、おっぱい触るだけだったのに・・・、既成事実を作らせて二度と離れられないように・・・しようと・・・したの・・・。」

「・・・もう言わなくていい！それ以上は辛くなるだけだから！」

さらにその先を言おうとしたボーマンドの話を切り上げる為に、大声を上げる信彦。

「・・・これ以上は、本当に辛くなるから。これ以上、傷を抉ることはしたくないから・・・。」

「・・・ありがとう・・・。」

信彦は念を押すように止める。

「・・・／／／」

ポーマンダは顔を赤くしている。

「しばらくは外に出歩いたら危ない・・・かも。」

信彦が一人、ベッドに座り思案に耽っていたら・・・

コッソ。

ポーマンダが信彦の肩に頭を置いたのだ。

「ん？どしたの？」
「・・・／／／」

そして、急に信彦にしがみつくように抱きつき・・・

「私・・・あなたに・・・、ついていきたい・・・。あなたに・・・、私の全て・・・、捧げたいの・・・／／／」
「・・・そんな発言するのモどうカと思フヨ？」

物凄イ爆弾発言をするボーマنداに何気なく突ッ込む信彦。

「こんなに優しくされたこと・・・、無いから・・・。あなた以外に優しくしてくれる人が・・・、いない氣がするから・・・／／／」
「俺の場合、素なんだけど・・・」

「それでも・・・。だ、だって、そ、その・・・、わ、私・・・／／／」

「私？」

「・・・あなたが・・・、好き・・・なの・・・／／／」
「・・・」

信彦は言葉を失った。

ただ単に、『助けただけで好かれるものなのかなあ・・・？』と思つていた。

ボーマンダは、その後も特に何かをすることも無く、ただただ信彦にもたれかかるようにしていた。

その夜、アイ達は普通に借りれた一室で雑魚寝、信彦とリル力はボーマンダを落ち着かせるためにボーマンダのいる病室で寝ることにした。

ただ問題があったことは一つ。

寝る前にボーマンダが、

「一緒に・・・寝よ・・・？」

と涙目＋上目使い＋顔を赤らめて隠すというコンボで頼み、リル力がそれに嫉妬、結局1つのベッドに三人が寄り添って眠る（信彦は抱き枕）という奇妙な光景が展開されていた。

(寝る直前、信彦はボーマンダに『レミ』と名付けた)

To the next Story...

手持ち萌えもん：信彦

正規メンバー

ミナ（リザード♀）

データ前回と変わらず

おまけ：レミ救出に奮闘。

アミ（エアームド♀）

データ前回と変わらず

おまけ：今回出番なし。

アイ（フシギソウ♀）

データ前回と変わらず

おまけ：リルカの本気に怯えた。

リンカ（ヘルガー♀）

データ前回と変わらず

おまけ：今回出番なし。

ユイカ（グラエナ♀）

データ前回と変わらず

おまけ：今回出番なし。

ユミナ（サンド色違い♀）

データ前回と変わらず

おまけ：レミのスタイルの良さを羨ましがる。

非正規メンバー

リルカ（サーナイト♀）

データ前回と変わらず

おまけ：レミ救出時、味方さえ怯えさせた。

レミの恋愛感情に嫉妬する。

クロナ（ズバット♀）

データ前回と変わらず

おまけ：レミ救出時、レミの胸で何度か息を止められていた。

ルミナ（チヨンチー♀）

LV：13

ヤンデレな性格

おまけ：今回出番なし。

その他

ユウカ（ブルー♀）

LV：10

デレデレな性格（極度の甘えん坊）

おまけ：色々と知らないこともある、純粋な子。

レミ（ボーマンダ♀）（漢字で書くと『麗美』）

Lv・50

いちずな性格（リルカに似ている？）

技 ドラゴンクロー

そらをとぶ

かみくだく

かえんほうしゃ

おまけ：ロケット団から逃げ、落ちてきたところを信彦達に助けられる。

信彦の優しさを知り、惚れる。

（現状、信彦のことは『主』という感覚ではなく、『一人の男』としてしか見れない）

Story 12 災いと落龍（後書き）

今回参入したレミは、萌えもんたちの中ではあまり積極的ではないほうです（抱きつくことをあまりしない、という方向で）。なので、所謂おねだりでも難しすぎないことだったりします。

次回、Story 13 『サントアンヌ号大戦闘』、お楽しみに！

Story 13 サントアンヌ号大戦闘（前書き）

遅くなりまして申し訳ありません！

今回は大戦闘、とありますが、大袈裟な表現です。

Story 13 サントアンヌ号大戦闘

朝。

「ますたあ、朝だよ・・・？」

ミナが信彦達を起こしに来た。

「ますた・・・はううつ！？／／／」

ミナはベッドの上を見て素っ頓狂な声を上げてしまった。

ベッドの上では・・・

「ふぐ・・・うぐ・・・」

と、かなり苦しそうに呻く信彦と

『・・・』

幸せそうに信彦に抱きついているレミとリルカ。

「あう・・・あう・・・あう・・・／／／」

ミナはミナで、そういうことに全く耐性が無かったために赤面しきってしまっていた。

「ミナちゃん？どうしたの？」

いつまでも降りてこないミナを心配してか、アイが来た。

「あ、あ、ああアイ！～！どどどどうしよう、どうしよう！？／／／」

「み、ミナちゃん！？どうしたの！？」

「べっ、べっ、べっ、ベッドでますたあが# %@*#○+□・・・／／／」

「み、ミナちゃん！お、落ち着いて！？分かるように喋ってよ！？」
「あわ、あわ、あわ、あわっ！？／／／」

完全にパニックになってしまっているミナ。

「一体どうしたんですか？」

寝ぼけ眼でリンカとユイカが登ってきた。

「み、ミナちゃんが暴走してて何言ってるのかわかんないの……」

「■。 § ± ÷ @!?!?」

「見事に暴走してますね……」

まだ寝ぼけているリンカ。

「でも一体……ああああっ!!」

ユイカが部屋を見たとき、悲鳴をとれる声を出した。

「ま、マスターが……、マスターが……、リルカとボーマンドと寝てる……!!?」

「なっ!?!?」

ユイカの声に戦慄するリンカ。

『マスターに抱きついていいのは私だけなんですっ！！』

同時に信彦に飛びかかるリンカとユイカ。

「ダメっっ！！マスターに抱きついていいのは私なんだからっっ！！」
「違うのっっ！私なのっっ！」

更にアミヤルミカも参戦。

「がふうっ！？」

信彦はその飛びかかりで目が覚めた。

「な、なんですかいきなり！？」

リルカも同時に目が覚めたようだ。

「ふみゅ・・・？」

レミも目が覚めた。

「あーあー、皆恋い焦がれちゃってるわね・・・」

クロナは入り口で呆れ返っていたが・・・

「はあ・・・／＼／」

「ユミナ、あんた、なんで顔赤くしてるの？」

「あーゆーの・・・、アリです・・・／＼／」

「・・・よくわからないわ・・・」

ユミナは萌えもんたちが信彦の上でもぞもぞ動いているのを見て恍惚の表情を浮かべていた。

ユウナは・・・

「みゆ・・・、もう・・・たべられにゃいよ・・・」

まだ夢の中にいた。

「・・・とりあえずだけど、仲間になったボーマンダのレミ。」
「みんな、よろしく・・・ね？」

恐る恐る、といった形で言葉を発するレミ。

あの事があったからなのか、やはりまだ怯えているような感じがするのだ。

「大丈夫だって。朝のあの事があったからこんなぴりぴりしてるけどいい子ばかりだから。」

信彦が言った瞬間、ほとんどの萌えもんが『ボンっ！』とでもなるかのように顔から煙を出した。

「れ、レミ！あなたの好きにはさせないからね！？／／／」
「え、えつと、その・・・／／／」
「マスターが好きなのはあなただけじゃないんですっ！／／／」
「顔赤くしながら言わないでよ・・・」

爆弾発言的なものを連発されて、信彦は困っていた。

「……（うるうる&ギョウツ）」

涙目で信彦の腕を抱きしめるレミ。

「……とにかく、大丈夫だから。ね？」

「あなた達も脅さないの！」

「リルカだってマスターに抱きついて眠ってたじゃん！」

「そつ、それは！その、あの、け、決して羨ましかつたものではありませんからね！？／＼／＼」

「羨ましがってるじゃん……」

信彦がなだめ、リルカが叱責するものの、アミに朝のことを指摘されて焦ってしまった。

結局それをクロナに突っ込まれていた。

「ふみい……」

ユウカはまだ眠たそうだった。

「と、とにかく！サントアンヌ号に行くよ！！」

信彦の一喝で静まり返った一同は、サントアンヌ号に向かった（リル力は当然、レミもボールに入れることはできない、という理由で出しっぱなしだ）。

「ふわぁ・・・」

「おっきいなぁ・・・」

サントアンヌ号の大きさを見てただただ驚くだけしかできないミナとアイ（この二人は特別に出していた）。

「さ、チケットもあるし、乗ろっか？」

「う、うん！！」

ミナは目がきらきらしていた。

「ふふ・・・、ミナは船に乗るのが初めてですよね・・・」
「私も初めてだから楽しみー!!」

アイもどことなく興奮していた。

そして、乗船した。

「ふわぁっっ・・・」
「ほへえっっ・・・」

またまた驚きの声を上げる二人。

「気に入った・・・みたいだね・・・」

信彦は何気にホッとしていた。

レミは・・・

「ほわぁ・・・」

信彦の腕に抱きついたまま、驚きに満ちた声を上げた。

「・・・ご主人様、目的が何かあったのでは？」

「え？あ、うん。実は船長に居合切り見せてもらおうと思ってね。船長が居合切り名人だ、って聞いたから・・・」

「へえ・・・」

リルカも目的を聞いて納得した。

そして、船長室に向かって行つた。

船長室前の通路。

「あ、船長室への階段だ。」

「では、もう少しですね。」

と言いながら向かったら・・・

カン、カン、カン・・・

春樹が下りてきた。

「Bonjour, Nobuhiko! 奇遇だな、こんなところで会うなんてよ!」

「春樹・・・、フランス語言うとかどんだけキザってんだっての・・・

」

嫌気が差したかのように言う信彦。

「これから船長にあつて居合切りを見に行くつもりなのか？やめとけやめとけ。」

「・・・なんでだよ？」

「実際に試してみたがな、これが意外とただの船酔い親父！そーいや、お前はどれだけ強くなったよ？見せてみる！」

「・・・OK、やってやるぜ！」

こうして、バトルが始まった。

が。

「行け、ピジョン！」
「はい!!」

春樹がピジョンを出し、信彦が、

「行け、ルミナ！」
「はい、ご主人様！」

ルミナを出して応戦した。

「ピジョン、『かぜおこし』!!」
「てやあっ!!」
「当たらないもん！」
「『でんきショック』!!」
「たあっ!!」
「ぶぎゃっ!!」

『かぜおこし』は当たらなかったが、『でんきショック』はきっちりヒット。

「もーっ、もーっ!!」

ピジョンもちよつと怒り出したようだ・・・

「ルミナ、抱きついて『でんきショック』!!」

「ご主人様に!？」

「俺じゃなくてあつちに!」

「う、うん!!」

ルミナが振り向いたとき、ピジョンは・・・

「だあああああつ!!!!」

突っ込んできた。

「うわあつ!!」

ピジョンが通過した瞬間、ルミナは偶然ピジョンに引っ掛かり・・・

「もーっ!パンツ見えちゃうじゃん!（バリバリバリ!!）／／

／
「ぴぎゃあああああつ!!」

(信彦：し、白・・・／／／)

きつちり電撃が当たり、ピジョンは墜落、目を回した。

ちなみに、信彦にルミナのパンツが偶然見えたのは余談だ。

「ご主人様以外の男の人にパンツ見せたくないのに・・・／／／」

スカートの裾を下に引つ張り、隠しているルミナ。

「ルミナ、交代ね。」

「・・・ご主人様、見た・・・？／／／」

「み、見てない見てない・・・／／／」

「・・・ご主人様なら見てもいいのに・・・／／／」

ルミナはスカートを下に引つ張りながら戻ってきた。

「行け、ラッター!!」

「僕に任せて!」

僕っ娘・ラッタを繰り出した春樹。

「だったらこっちは・・・」

と、アミを構えた瞬間。

「あ、あの、ご主人様・・・」

レミが信彦に声をかける。

「れ、レミ？」

ついつい信彦は手を止めてしまう。

ちょっとー！私の出番を取らないでよ！

ボールの中でアミが抗議。

「わ、私にも戦わせてください！何もできないのは、恩返しできないのは辛いんです！」

「とはいっても、あまり戦わせたくないし・・・」

「でも！」

レミの目には、はつきりとした意思が見て取れた。

「・・・レミ、頼んだよ。」

「はいっ！」

レミ、初陣。

「ラッタ、一気に蹴散らせ！ボーマンダは速度が無い！」
「うん！」

ラッタが一気にたたみかけようとするが・・・

「レミ、『そらをとぶ』！！」
「っ！」

レミはラッタの突撃を間一髪回避するように空に舞った。

「外した！？」

「そのまま落下！」

「はああああああああああっ！！！」

そしてラッタに向かった急降下し・・・

「ぎゃふん!!」

ラッタに直撃、ラッタは倒れた。

「くっ、行け、フーデイン！」
「・・・まかせろ。」

春樹はフーデインを出した。

その後、レミは単騎春樹の萌えもんを蹴散らすという神技を披露した。

「まっ、また！？こ、これも偶然だっ！」

「偶然は何度も続かねえ！これが真理だ！」

「・・・まあいいや。それじゃな、バイビー！」

そして春樹は去って行った。

「・・・全く・・・ま、いつか。船長、大丈夫かな・・・」

そして船長室に向かった。

船長室。

「失礼しまーす・・・」

信彦はこっそりと、だが断りを入れて入って行った。

船長は・・・

「おええええええええ・・・」

明らかに吐いていた。

「・・・背中をさすってあげれば多少は楽になるかな・・・？」

そして信彦は船長の背中をさすってあげた。

「・・・ふう、落ち着いたよ。ありがとう。」

復活した船長は信彦にお礼を言う。

「いえ、このくらいなんとも。」

「それで、私に何か用かな？」

「あ、いえ、居合切りを見せてもらいたくて・・・」

「・・・踏む・・・、すまんね、私の状態が全快なら見せてあげられるものを・・・。・・・そうだ、この秘伝マシンを持って行きなさい。」

ノブヒコは『ひでんマシン01・いあいぎり』を てにいった！

「あ、ありがとうございます！」

「助けてくれたお礼だ。それくらい構わないよ。さあ、サントアン又号は間もなく出港だ！また逢う日まで！」

「はい、また！」

信彦はサントアンヌ号を後にした。

ボー……

出港の合図とともに進む船を見て、アイとミナは目を輝かせて見ていた。

「……さ、一旦ハナダシティに戻る？そして、ハナダジムをクリアだ！」

『おーっ！』

息びつたりに返事した面々は改めて気合を入れ、一路、ハナダシティに戻ることにした。

T
o
t
h
e
n
e
x
t
S
t
o
r
y
:
:
:

手持ち萌えもん：信彦

正規メンバー

ミナ（リザード
♀）

データ前回と変わらず

おまけ：色恋ごとに非常に初心。

リルカとレミが信彦に抱きついたまま寝ているのを目撃し、
地球外言語で思わず会話してしまった。

アミ（エアームド♀）

データ前回と変わらず

おまけ：レミに活躍の場を取られた。

アイ（フシギソウ♀）

データ前回と変わらず

おまけ：サントアンヌ号に目を輝かせた。

船は意外と大好き。

リンカ（ヘルガー♀）

データ前回と変わらず

おまけ：リルカとレミが信彦に抱きついたまま寝ていたことに嫉妬し、飛びかかった。

ユイカ（グラエナ♀）

データ前回と変わらず

おまけ：リルカとレミが信彦に抱きついたまま寝ていたことに嫉妬し、飛びかかった。

ユミナ（サンド色違い♀）

データ前回と変わらず

おまけ：誰にも理解できないような脳内妄想を繰り広げた。

非正規メンバー

リルカ（サーナイト♀）

データ前回と変わらず

おまけ：クロナに嫉妬したと突っ込まれた。

クロナ（ズバット♀）

データ前回と変わらず

おまけ：最近ツツコミ役に回りやすい。

ルミナ（チヨンチー♀）

Lv.13

ヤンデレな性格

おまけ：信彦にパンツを見られるという事故発生（本人曰く、『主人様にだけなら見られてもいい』らしい）

その他

ユウカ（ブルー♀）

LV・10

デレデレな性格（極度の甘えん坊）

おまけ：朝に弱い。

レミ（ボーマ[♀]ンダ）

LV・50

いちずな性格（リルカに似ている？）

データ前回と変わらず

おまけ：戦うことについて、自らの意思で参戦を要求。

信彦へはアミやリンカたちのように過剰な愛情表現をせず、控え目な恋をするタイプと判明。

Story 13 サントアンヌ号大戦闘（後書き）

次回から『後書き、色々やりますラジオ！』を始めます（後書きです）。

内容は質問に答えたり補足を入れたり、です。

パーソナリティは我が義妹のミイナです。

次回、Story 14 『ハナダジム決戦！見せつけた古参の実力』、お楽しみに！

Story 14 ハナダジム決戦！見せつけた古参の実力（前書き）

萌えもん誰得ラジオ

BGM：OK！（ポケモンより）

「（ミイナ）・・・はっ！も、もう始まっちゃってる！？ふえ、ふええ・・・」

え、えと、『萌えもん誰得ラジオ前半戦』です！！わ、私はぱーそなりていの、三月語の妹のライチュウ♀のミイナです！！

えと・・・ま、まずは・・・お、遅くなってしまつて申し訳ありませんっ！！

・・・遅くなって申し訳ありません・・・あう・・・

えとえと、ここでは『誰得後半戦』に来るゲスト紹介とか、今回の内容の大雑把な説明とか色々します！

と、とりあえず今回の話の説明は・・・

ハナダジム戦です！！皆が勝てるかどうかは・・・見てのお楽しみと言ふことで・・・

で、では、後半戦でまた会いましょー！！」

Story 14 ハナダジム決戦！見せつけた古参の実力

クチバシティで『ひでんマシン・いあいぎり』をもらい、ハナダシティに戻ってきた信彦達。

「・・・しまった、色々あったから戦うの忘れてた・・・」
「どうするの、マスター？」

アミが腕に抱きつきながら信彦に聞いた。

「・・・仕方ないか。反則だっと思ってられるかもしれないけど、アイとルミナがHPが少なくなったり戦闘不能になったあとは全部リルカに頼む、という方向にする。」

「・・・どういう・・・ことですか・・・？」

不思議に思い、問いただすリルカ。

「俺のパーティーで唯一カスミと張り合えるのは草タイプのアイと水・電気タイプのルミナ。それ以外で戦えるのは誰もいないだろ？」
「わ、私だって戦えるもん！」

アミが張り合おうと声を上げる。

「アミ？君は鋼・飛行でしょ？相手はスターミーが絶対にいる。電気技だって当たり前放ってくる。そんな相手に勝てる？」
「あ、う・・・」

正論に次ぐ正論。

アミは反論ができなかった。

「だから、アイとルミナが戦えなくなったらリルカ、というわけ。反則、卑怯だ、と言われてもかまわないさ。」
「だったら・・・いいですけど・・・」

リルカは渋々、といった形で了承した。

「お、話しながら歩いてたからもう着いた。・・・戦うの忘れてたからお金無いし・・・」

「カスミとは私ができるだけ戦うね。ご主人様。」

アイが可能な限り続ける、と言いだす。

「ホントはそんなこと強要したくないんだけど、ね・・・」

「大丈夫ですよ！」

「ご主人様と私の愛があれば！」

「それでも勝てない時は勝てないんだけどね・・・」

落胆しながらもハナダジムに入っていく。

「つーことで、たのもーっ!!」

意気揚々と入っていったが・・・

「・・・遠い・・・」

ある意味落胆。

トレーナーはいるけども、カスミまでの道のりは長かった・・・

「さて、アイ。先にいるトレーナーはルミナを育てたいからカスミまでの戦力温存OK？」

信彦はアイのボールに話しかけ、そのボールは了承の意を表すようにカタカタ動いた。

「よし、ルミナ！カスミまで頑張って戦って行こう！！」
「うん！！」

信彦とルミナは、たった二人で所属トレーナーと戦い始めた。

V S 海パン野郎。

「行け、タツツー!!」

「ルミナ、『でんきショック』!」

「てやー!!」

「ふみゆうっ!!……ふにゃあ……」

「勝ったー!!」

ルミナは　ＬＶ１４に　あがつた！！

「次はシエルダーだ！」

「いつくよー！！」

「『ちようおんぱ』！」

「ううゝ・・・」

「当たらないよ！食らって、『つららばり』！！」

ピュン、ピュン、ピュン、ピュン、ピュン！！

「あたっ、いた、あうっ、あたっ、はうっ！」

5かい あたった！

「なんで全部当たったの！？」

「ふっふっふ、私の特性は『スキルリンク』、連続技がたくさん
当たるんだよ！！」

「うにいゝ！！」

ルミナがちよつとお怒り状態に。

「だったら『でんきショック』！」

「ふみゅっ！！」

きゅっしょに あたった！

「あゝ．．．、もうだめえ．．．きゆう。」

シエルダーは たおれた！

「よし、勝った！」

「くそお．．．」

ノブヒコは しょうきんとして 115えん もらった！

「．．．少なっ！」

そんな愚痴をもらしつつも、先に進む一行。

「お、いたい・・・」

いたいた、と言おうとして・・・

「あなたの相手は私よ！カスミの出る幕じゃないわ！」

挑まれた。

V S ピクニックガール

「行けえ、トサキント！」

「ルミナ、まだいけるか！？」

「大丈夫大丈夫！さっきの『つららばり』もあまり効いてないもん！」

「じゃ、そのまま行け！」

「うん！」

ルミナ（チョンチー）Lv14 VS トサキントLv19

『（ルミナ／トサキント）！』ちようおんぽ『！！』
『わああああああっ！！』

お互いに同じ技を出し合った結果・・・

「はらほろひれはれ・・・」
「はわわ、はわわ、はわわ・・・」

・・・見事に同時に混乱した。

「あちゃー、失敗したか・・・」
「トサキント、目を覚まして！！」

お互いに明後日の方向へ歩き出したりぶつかったり、攻撃はできてない。

「ルミナ！」

「はっ！！（（。。。！）（）」

信彦の声により、ルミナが先に目を覚ます。

「ご、ごめんご主人様！」

「まず先に倒そう！『でんきショック！』

「てりゃっ！」

「（バチイっ！）きゃううっ！！！」

でんきショック、トサキントにきっちりヒット。

「うきゆう・・・」

「と、トサキント！？」

「よっし、俺達の勝ちー。」

「くうう・・・」

意気揚々とカスミの許へ向かった。

「一つことで、勝負！」

「いいわよ。・・・そういえばあんた、萌えもんトレーナーにはポリシーってもんがあるの！あんたはポリシーってある！？私のポリシーはね・・・、水タイプの萌えもんで攻めて攻めて攻めまくることよ！！」

「俺のポリシー・・・、無いね！俺はただ、自分の萌えもんを信じて戦うことだけ！」

『行け！（アズマオウノアイ）！！』

「ジムリーダー、ハナダジム、カスミ！チャレンジャー、マサラタウンの信彦！使用萌えもんは6匹！」

恒例の審判の声で、決戦の火蓋が切って落とされた。

「アズマオウ、牽制で突いて！」

「避けて投げちまえ！」

「とりやつー！！」

アズマオウは『つつく』ために突っ込んでくるが・・・

「当たらないよ！それで・・・」

ガシッ！

「えっ！？」

「いいい・・・やつー！！」

そのまま直に掴んで・・・

ガンー！

「かふっ・・・」

奇麗にバックドロップを決めた・・・

「あ、アズマオウ！？」

「アイ・・・、君は格闘家を目指すのかい？ 投げろ、とは言ったけど、バックドロップを決める、なんて言っただけだよ？」

「え、えへへ・・・、つい・・・／／／」

つい、でバックドロップを決めてしまったらしい。

アズマオウは・・・

「きゅう・・・」

「アズマオウ、戦闘不能！ フシギソウの勝ち！」

倒れていた。

「アズマオウ、ごめんね。次、ニヨロトノ、お願い！」

「ほいほい！」

「アイ、頼むから格闘劇はやめてよね!？」

「了解です！」

そしてニヨロトノは突っ込んでいったが・・・

パシン！

「へぶっ!？」

ピシピシピシピシピシピシ・・・

[illegible]

どこかで見たような光景でアイは二ヨロトノの頬を蔓で叩いていた。

「え、え！？」

「あ、アイ!？」

...

「あぶぶぶぶ……きゆう。」

「二ヨロトノ、戦闘不能！フシギソウの勝ち！」

「あ、また勝った……」

「くうっ！スターミ、お願い！」

「はい。」

カスミの3匹目は、危惧していた通り、スターミーだった。

「アイはまだ戦えるけど、ルミナは戦えない……アイが倒れたら……、リルカ、頼むね……」

「はい。」

リル力はいつでも戦闘可能のようにスタンバイしていた。

「あの二人のように、あっさり倒して見せる！」
「・・・私は、そんな簡単にはいかない・・・」

アイはさっきの二人のように、あっさりと倒そうとしたが、スターミーは迎撃準備が出来ていた。

「アイ、無闇に突っ込んだらダメ!!」

リルカが制止をかけるが、既に時遅し。

「スターミー、『サイコキネシス』!!」
「・・・あああっ!!」
「うきやあっ!!」

アイは避けることができずに、『サイコキネシス』の直撃を急所に受けてしまった。

「あ、アイ!？」
「ご、ご主人様あ・・・、ごめんなさい・・・きゆう・・・」
「フシギソウ、戦闘不能!スターミーの勝ち!」

アイは たおれた!

「ごめんな。すぐに止められなくて・・・」

「相手のことを知らずに突っ込んだ私も悪いんです・・・」

「・・・ゆつくり休んでね。・・・リルカ、あとは全て・・・任せ
たよ。」

「解りました・・・。では、ここからは全て、私が！」

そして、リルカが戦場へと、言ってもバトルフィールド。過大発言
しただけに立つ。

「サーナイト・・・！？スターミー、気をつけて！」

「・・・素早さは私より下・・・、先にかたをつけければ問題は・・・」

「遅い遅いとたかをくくってはいけませんよ！」

「なっ・・・」

サーナイトらしからぬ速さに驚くことしかできなかったスターミー。

仕方が無かるう、Lv差が大きいからだ。

「この距離なら、絶対に外れませんよね！」

「あ・・・、ああ・・・」

流石に力量差を感じ、ゼロ距離で技を放たれることに怯えてしまう
スターミー。

「喰らいなさい、『シャドーボール』!!」
「ぐうううっ!!」

ゼロ距離で放たれた『シャドーボール』は、スターミーの急所に当たり、バトルフィールドの端まで吹き飛ばされる。

ドンッ!!

「か・・・は・・・」

壁にぶつかった衝撃で肺の中の空気をすべて吐き出し、そのままスターミーは戦闘不能に。

「スターミー、戦闘不能!サーナイトの勝ち!」
「さあ、次はどなたですか!?!誰であろうと相手になります!」

リルカはカスミに向けて堂々と言ったのけた。

「す、すごい……、リルカとますたあってこんなにコンビネーションいいんだ……」

ボールの中からリルカの戦いを見ていたミナは真剣に驚いていた。

信彦は一切リルカに指示を出していない。

リルカは自分の意思だけで動き、技を放った。

ミナはそれが二人の長年の付き合いの結果であり、信頼し合った結果なのだと理解した。

「うう……」

「ふにゅう……」

「ずるいです……」

アミ、リンカ、ユイカは信彦とリルカの信頼の証を見せられて嫉妬していた。

「す、すごいよ……。指示が無くても勝てるのって、Lv差があるからじゃないよ……。お互いを信頼し合ってるからなんだ……」

」

クロナは正直な思いを告げ・・・

「・・・／／／」

ユミナは惚れて・・・

「凄い凄い!!」

ユウカは褒めていた。

レミは・・・リルカに対して嫉妬と羨望の目を向けていた・・・

「ギャラドス！お願い！」

「了解！」

「4番手はギャラドス・・・、特性が『いかく』でも関係ありません！！」

リルカは毅然とした態度でギャラドスと対峙する。

「ハナダジムの特攻弾と呼ばれた私に敵うとでも？」

「思いますよ・・・？私は護るものを護るために力をつけたのですから。勝ち続けるだけが使命のあなたとは違うのですよ？」

「い・・・、言わせておけばあつ！！！」

逆上したギャラドスがリルカに向かう。

「あんなだけは・・・、絶対に倒す！！！」

無謀にも突っ込んでくるギャラドス。

「愚かなことを・・・」

自然な行動で特攻を回避したリルカは、ギャラドスの背に手を当てた。

「なっ・・・!？」

「これが・・・力の差です!」

背にあてた手に力を込め・・・

「これが・・・個体値V判定の努力値全振りによって生まれた四倍判定『10まんボルト』!!」

バリバリバリバリ!!

「ぐあああああつ!?!」

『10まんボルト』を放った。

「が……ぐ……」

ズウウン!!

「ギャラドス、戦闘不能!サーナイトの勝ち!」

「まさか、この子も倒されるなんて……」

カスミは驚きを隠せなかった。

その後、ゴルダック、ジュゴンと繰り出したものの・・・

「これで・・・終わりです!!」
「うきゅうっ!!」

リルカはたった一撃でその二匹を沈めた。

「ジユゴン、戦闘不能！サーナイトの勝ち！よってこの試合、マサラタウン信彦の勝ち！」

「リルカ、お疲れ様。」

「いえ、これが私たちの使命ですから・・・」

リルカはいつもの態度で信彦の許へ歩んだ。

「ふう・・・、私の完敗。ブルーバッチを渡すわ。これでLv30までの人からもらった萌えもんはあなたの言うことを聞くわ。・・・それと、これも貰って。」

ノブヒコは わざマシン03を もらった！

「うん、ありがとう!」

「これからも色々回るんでしょ? 頑張つてね!」

「ああ!」

カスミから激励をもらいジムを後にした一行。

「ご主人様、次はどこへ？」

「そうだね・・・、クチバジム、っていうのもありんだけど、先にタمامシ行きたいな・・・」

「何故・・・ですか？」

タمامシへ行きたい、という信彦に疑問を浮かべるリルカ。

「とりあえずミナに自信を持たせてあげたいし・・・色々、ね。」

「では、行きましようか・・・」

「だね。」

そして、一行（とは言っても信彦、リルカ、レミだけ。ユウカは信彦の背中で寝ている）は一路変更し、イワヤマトンネルへ向かった。

上空から一匹の青い萌えもんが、ちよつと離れた木の陰から、同じく青黒の萌えもんが信彦達の姿を見ていた。

T
o
t
h
e
n
e
x
t
S
t
o
r
y
:
:
.

手
持
ち
萌
え
も
ん
:
信
彦

正規メンバー

ミナ（リザード♀）

データ前回と変わらず

おまけ：リルカと信彦の信頼関係を見て感心。
自分もそんな関係になりたいと思う。

ルミナ（チョンチー♀）

Lv.14

技前回と変わらず

おまけ：Lvが低いのにもかわらず、奮闘。
頑張った結果、Lvが上がった。

アイ（フシギソウ♀）

データ前回と変わらず

おまけ：カスミ戦で意外な一面を見せる。

投げるとなると格闘技に持ち込んでしまつという、お茶目な一面を見せた。

リンカ（ヘルガー♀）

データ前回と変わらず

おまけ：リルカと信彦の信頼関係を見て嫉妬。

ユイカ（グラエナ♀）

データ前回と変わらず

おまけ：リルカと信彦の信頼関係を見て嫉妬。

リルカ（サーナイト♀）

データ前回と変わらず

おまけ：相手に絶対的な力量差を見せ、仲間には主・信彦との信頼関係を見せた上に戦い方を見せた。

戦い方・立ち回りは歴戦の猛者を連想させ、カッコイイ。

非正規メンバー

ユミナ（サンド色違い♀）

データ前回と変わらず

おまけ：リルカと信彦の信頼関係を見て、顔を赤くしたり惚れたり・
・

相変わらずの状態だった。

クロナ（ズバット♀）

データ前回と変わらず

おまけ：リルカと信彦の信頼関係を見て、それに素直に感心、誉めたたえた。

アミ（エアームド♀）

データ前回と変わらず

おまけ：リルカと信彦の信頼関係を見て嫉妬。

その他メンバー

ユウカ（ブルー♀）

データ前回と変わらず

おまけ：戦いには相変わらず不参加だが、何故か寝ていた。

レミ（ボーマンダ♀）

データ前回と変わらず

おまけ：リルカと信彦の信頼関係を見て、リルカに羨望と嫉妬の目を向ける。

自分もそんな関係になりたいと誓う。

Story 14 ハナダジム決戦！見せつけた古参の実力（後書き）

「（ミイナ）え、えと、『萌えもん誰得ラジオ』後半戦でしゅっ！
．．またかんじやった．．

こ、今回は補足をします！

ま、まずは特性・スキルリンクです！

主にシエルダーやパルシェン、チラーミイとかが持っている特性で、『おうふくビンタ』や『つらばり』のような2～5回複数攻撃する技を絶対5回当てる特性です！第五世代．．では一撃当たりの威力が向上した上に、『きあいのタスキ』と言うアイテムの性能変化という追い風もあってかなり使い勝手が良くなっているそうです！

次にアイがニョロトノにやったあの行動についてです！

あれは『ウサビッチ』というロシアの．．．くれないあにめ．．．なんだろこれ？．．．の第一話のシーンを再現した、とお兄ちゃんが言っていました！！

最後にリルカの台詞の『個体値V判定の努力値全振りによって生まれた四倍判定』『10まんボルト』！！』ですが．．

個体値というのはポケモンの種族値とはまた違った隠しステータス．．．のことで、それは1～31の間の数値で出てきます！31が最高で、それをV判定、というそうです！ちなみに30がU判定．．．よく分かんないよお．．．。それで、努力値も隠しステータスで、ポケモン・萌えもん両方のステータスに一番影響が出てくるものです！

こゝ今回はここまででしゅっ！・・・またかんじゃったよ・・・
くすん・・・

え、えと、次回はあ・・・『Story 15 むにゅんともにゅ
んと三国分立』・・・

お兄ちゃん！変なタイトルつけないでよお！！恥ずかしいよお・・・
／／／
」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0590o/>

萌えっ娘もんすたぁ ～カントー萌えもんリーグチャンピオンへの成長記～

2011年8月11日11時47分発行